

仙台市文化財調査報告書第290集

大野田古墳群

—第8次発掘調査報告書—

2005年2月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第290集

大野田古墳群

—第8次発掘調査報告書—

2005年2月

仙台市教育委員会

序 文

日頃より仙台市の文化財保護行政に対しご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。仙台市は宮城県のみならず、東北地方の中枢都市として文化的・経済的に飛躍的な発展を遂げております。この事は開発事業に特に顕著で、長町副都心開発による都市基盤整備事業をはじめ、市内各所において土地区画整理事業や道路の整備、公共・民間による大規模施設などの建設が立て続けに行なわれております。

市内には旧石器時代から近世にかけての数多くの埋蔵文化財を有しております。これらの中には一昨年に国史跡に指定され、調査・整備の進む仙台城跡や遺跡を保存し公園整備が進んでいる山田上ノ台遺跡、陸奥国分寺、陸奥国分尼寺、さらにつくつての陸奥国府と考えられる郡山遺跡など、学術的評価が高い遺跡も多く、私たちはこれらの文化遺産を後世に伝える責務を負っているものといえます。また今後も増えると予想される埋蔵文化財調査に対応した体制整備も求められるなど、課題も山積しております。

本報告書は、近年開発の日覚しい富沢駅周辺開発事業に関連したものであり、付近一帯に所在します大野田古墳群の調査成果を収録したものです。この遺跡は有数の古墳分布地であると共に、中世の幹線道路や古代の畝跡、さらに近年は新たに古代の役所跡の存在が推定されるなど、今後ますます注目される遺跡といえます。この様なことからも本書がより多くの方々に活用され、学術研究の場においても役立てれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告事刊行に至るまで、地元の皆様、関係諸機関、調査に参加なされた多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝申し上げ、発刊のご挨拶と致します。

平成17年2月

仙台市教育委員会

教育長 阿 部 芳 吉

例 言

1. 本書は、知的障害者通所更生施設「大野田はぎの苑」の移転建設工事に伴い、平成16年6月から同年8月にかけて実施した仙台市太白区大野田字宮脇に所在する大野田古墳群の発掘調査（第8次調査）の成果を収録したものである。
2. 本調査は、仙台市教育委員会のもと、有限会社山武考古学研究所が行った。
3. 本書の作成・編集作業は、仙台市教育委員会文化財課 佐藤淳、有限会社山武考古学研究所 湯原勝美・戸部孝一が行った。
4. 本書の執筆は佐藤淳の責任と指導のもとに、下記の通り行った。

第1章第1節 佐藤 淳

第1章第2節・第2章 戸部孝一

第3~6章 湯原勝美

5. 出土した石器の石質鑑定は、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター地質標本館の酒井彰氏にお願いした。
6. 調査及び報告書作成に関する諸記録、出土遺物などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 第1図は国土地理院発行の1/50,000の地形図「仙台」を使用した。
2. 第2図は仙台市発行の1/2,500の仙台市都市計画基本図「QE60-2」・「QE61-1」（平成10年修正）を1/2に縮小して使用した。
3. 上層注記に記載している土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1997）に基づいて認定した。
4. 調査の際の平面基準は、日本測地系・平面直角座標第X系を基にしている。
5. 全体図・遺構図

- (1) 遺構名については以下の略号を使用し、略号の後に種別ごとの連続番号を付けている。なお、小溝状遺構群については、遺構名の後に個別的小溝番号を付した（例／小溝状遺構群1群1）。
- SI：堅穴住居跡 SA：柱列跡 SD：溝跡 小溝群：小溝状遺構群 SK：土坑 P：柱穴・ピット
- (2) 層位名は基本層位をローマ数字、遺構内堆積土層位を算用数字で表記し、細分層についてはその後にアルファベットの小文字を付けている。
- (3) 全体の遺構配置図は1/150・1/200としているが、個別の遺構図については1/60の縮尺を基本としている。

6. 遺物図

- (1) 遺物の登録は種別ごとに行い、番号の前に以下のような略号を付けている。
A：縄文土器 B：弥生土器 C：土師器 Ka：剥片石器 Kc：砾石器
- (2) 石器の計測値で（ ）で示した数値は、残存値を表している。
- (3) 実測図中の土師器の網点は赤彩処理を、砾石器の網点はそれぞれ磨痕と敲打板を表している。
- (4) 遺物図は実寸で作成したものを、剥片石器は2/3、それ以外の遺物に関しては1/3の縮尺で掲載している。

本文・写真目次

序 文

例言・凡例

本文・写真目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査要項.....	1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境.....	3
第3章 調査の方法と経過.....	5
第4章 基本層位.....	6
第5章 検出遺構と出土遺物.....	8
第1節 Ⅲ層検出の遺構と遺物.....	8
(1) 溝跡.....	8
(2) ピット.....	8
第2節 V層検出の遺構と遺物.....	10
(1) 壁穴住居跡.....	10
(2) 杜列跡.....	14
(3) 溝跡.....	14
(4) 小溝状遺構群.....	17
(5) 土坑.....	18
(6) ピット.....	22
第3節 基本層出土の遺物.....	26
第6章 まとめ.....	28
引用・参考文献.....	29
写真図版	
遺構写真図版.....	31
遺物写真図版.....	41

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

大野田古墳群は、春日社古墳や土ノ壇古墳などの墳丘を残す古墳のほか、前方後円墳である鳥居塚古墳など現在まで30基以上の古墳が発掘調査により確認されている。これらの古墳からは埴輪が出土し、東北地方でこのような古墳が群集墳を形成する例はほかには知られていない。昭和63年の地下鉄南北線の開通以来、当地区は開発が進み、遺跡の東側を南北に走る都市計画道路建設に関わる調査においては、古墳のみならず中世の埋葬跡や道路跡など多くの発見があった。

大野田古墳群の調査は昭和52年に始まったが、調査の中心となるのは平成6年から現在まで継続して実施されている富沢駅周辺地区画整理事業とともに複数箇所の調査（第5次調査）である。この調査では20基程の古墳を確認するとともに、中世の幹線道路の発見のほか、遺跡のはば全域において古墳時代から古代の痕跡を確認するなど遺跡の性格解明に大きな役割を果たしてきたといえる。

今回の第8次調査は、同地区内にあった知的障害者通所更生施設「大野田はぎの苑」の区画整理地内での移転建築とともになもので、平成16年1月、施設を管轄する健康福祉局障害企画課と都市整備局富沢駅周辺開発事務所から移転計画の事業スケジュールが提示されたことを受け、同年3月に文化財課との間で埋蔵文化財発掘調査についての具体的協議を行った。この結果、調査は記録保存を目的とし、対象地の住民移転が終了後の6月1日より開始し、調査期間は敷地造成工事開始の9月までの3か月の予定で実施することとなった。調査にあたり、対象地の南側隣接地では遺跡認定のきっかけとなった古墳が発見されており、今回の調査により新たな古墳が発見されるか否かが古墳群の範囲を画すことになるとともに、近年周辺地区で発見が続いている官衙的性格を有する建物跡群や区画溝跡などのさらなる発見に期待を持たせるものとなった。

第2節 調査要項

1. 遺跡名称 大野田（おおのだ）古墳群（宮城県遺跡地名登載番号01361・仙台市文化財登録番号C-054）
2. 調査地 仙台市太白区大野田字宮脇地内
3. 調査理由 「大野田はぎの苑」移転建設工事に伴う事前調査
4. 調査主体 仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課）
5. 調査担当 調査係主任 佐藤 淳
調査員 湯原勝美（有限会社山武考古学研究所）
調査補助員 戸部孝一（有限会社山武考古学研究所）
6. 調査期間 平成16年6月1日～平成16年8月24日
7. 調査面積 調査対象面積 630m²
調査面積 550m²



No.	遺跡名	種別	立地	年代	No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	御乳園分寺跡	寺院	山林地	古代・中世	22	玉ノ城跡	古墳・古墳	自然埋葬	古文・和牛・古墳・古代・中世
2	御乳園分寺跡	寺院	山林地	古代	23	玉ノ城古墳	古墳	自然埋葬	山地
3	貴傳原遺跡	耕作・荒廃跡	山林地	先史・古墳・古墳・近世	24	大野田古墳群	古墳群・墓跡	自然埋葬	古墳・古代・中世
4	看守點跡	空堀・城壁	自然崩落	古墳・古代・古墳・近世	25	六反田跡	墓跡	自然埋葬	古文・私生・古墳・古代・中世
5	南小豆遺跡	集落跡・後	山林地	先史・古墳・古墳・古代・中世・近世	26	下ノ内道跡	墓跡	自然埋葬	古文・私生・古代・中世
6	近見塚古墳	前方後円形	自然崩落	古墳	27	下ノ内道遺跡	墓跡	自然埋葬	古文・私生・古代・中世
7	蓼科東側鳥居跡	鳥居跡	複合崩落地	古代	28	山上毛跡	墓跡	自然埋葬	古文・私生・古墳・古代・中世
8	菅原遺跡	自然崩落	自然崩落	古代	29	宮ノ若跡	墓跡	自然埋葬	日暮郡・延暦
9	久ノ上古道跡	集落跡	自然崩落	先史・古墳・古代・中世	30	上手内道跡	墓跡	自然	古文・和牛・古墳・古代
10	久ノ上古道跡	自然崩落	自然崩落	古墳	31	三井新道跡	墓跡	段丘	古文・古代
11	愛宕山噴火裂隙群A地盤	破壊地	段丘	古墳	32	野道跡	墓跡	段丘	古文・私生・古墳・古代
12	天守台の噴火裂隙群	破壊地	段丘	古墳	33	上野毛跡	墓跡	段丘	古文・古代
13	浅ノ川城跡	城跡	丘陵	古墳	34	主田各遺跡	生遺跡	段丘	古文・古代・後世
14	空坂古墳	前方後圓	自然崩落	古墳	35	釋迦台顛跡	自然崩落	古墳・古代・中世・後世	古墳・古代・中世・後世
15	浅ヶ崎噴火裂隙群	破壊地	段丘	古墳	36	松木道跡	墓跡	自然埋葬	古代・中世・古墳
16	ニッ沢噴火裂隙群	破壊地	段丘	古墳	37	葉尾跡	墓跡	自然埋葬	私生・古墳・古代
17	北目城跡	城跡	自然崩落	古文・私生・古墳・古代	38	安久東遺跡	墓跡	自然埋葬	私生・古墳・古代・中世・後世
18	相生湖跡	露頭跡・水田跡	自然崩落	古文・私生・古墳・古代	39	十日市跡	墓跡・谷跡	自然埋葬	古文・私生・古墳・古代・中世
19	西白根古道跡	露頭跡・峠道跡	自然崩落	古文・私生・古墳・古代	40	御河原跡	水田跡	自然埋葬	私生・古代・半林・近世
20	元雲遊跡	集落跡	自然崩落	私生・古墳・古墳・近世	41	下子根中道跡	墓跡	自然埋葬	古墳・古代
21	大野田古道跡	集落跡	自然崩落	古文・私生・古墳・古代	42	7ノ内道跡	墓跡・坂跡	自然埋葬	私生・古墳・古代・中世

第1図 大野田古墳群周辺の遺跡

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

【地理的環境】

大野田古墳群は、仙台市の南部、仙台市太白区大野田に所在する遺跡で、その範囲は東西600m、南北430mに及んでいる。今回、調査を行った地点（第8次調査地）は、遺跡の中心よりやや北寄りに位置し、地下鉄南北線富沢駅から東へ約350mの地点にある。

仙台市域の地形は、西部の丘陵地帯と東部の沖積平野に二分される。市域の東側に広がる沖積平野の中でも、名取川とその支流である広瀬川に挟まれた大野田地区を含む一帯は「郡山低地」と呼ばれている。郡山低地には、太白山に源を発する荒川などの小河川が曲流しており、同地区は、これらの河川の影響を受けて自然堤防・旧河道・後背湿地が複雑に入り組んだ地形となっている。

大野田古墳群は、名取川下流域の北岸に位置し、自然堤防及び後背湿地に立地する。標高は11～13m前後で、西から東へ向かって緩やかな傾斜がみられる。調査地の現況は、水田前に1m前後盛土して造られた更地であった。

【歴史的環境】

仙台市内の遺跡は南部に多くみられるが、中でも名取川下流域には数多くの遺跡が分布する。ここでは、今回の調査結果を踏まえ、縄文時代後期から中世を中心に大野田地区周辺の歴史的環境について概観する。

縄文時代後期の遺跡は、名取川下流域の北岸に集中する傾向がみられる。後期初頭の集落跡が検出された六反田遺跡、後期前葉の墓域が検出されたドノ内浦遺跡、後期前半の環状集石群・配石遺構などとともに大量の土偶が出土した大野田遺跡などがあり、後期中葉では大野田古墳群からも上塙が検出されている。

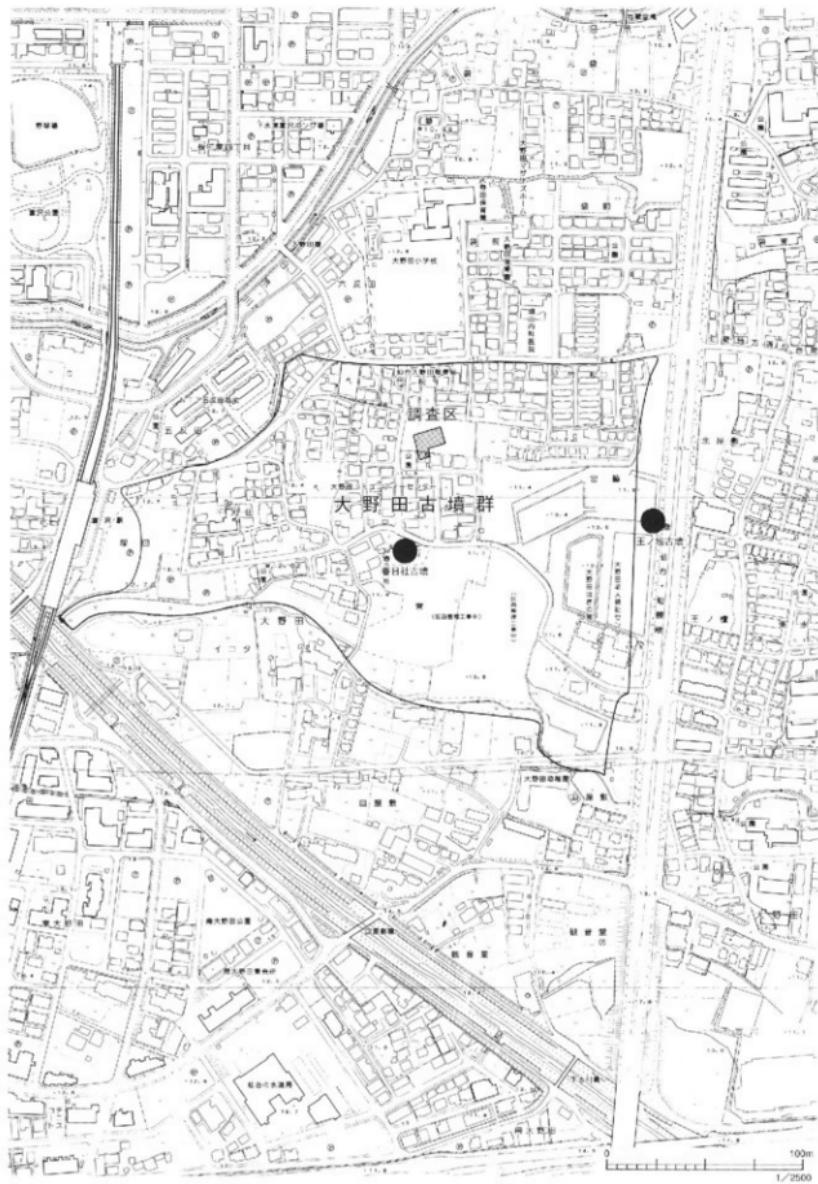
弥生時代には、広大な後背湿地に立地する富沢遺跡から水田跡が検出されているほか、西台畠遺跡では中期の柴棺墓、下ノ内浦遺跡からは後期の墓壙や堅穴遺構などが検出されているが、この時代の集落跡については不明である。

古墳時代の中期後半に入る郡山低地に古墳が出現する。古墳の分布は北部と南部に分かれ、北部の古墳は長町一利府構造線に沿った丘陵縁辺部に分布し、南部の古墳は大野田地区に集中してみられる。大野田古墳群には、これまでに30基以上の古墳が確認されている。同古墳群は、ほぼ中央に中型の前方後円墳である鳥居塚古墳と同規模で前方後円墳の可能性もある泰日社古墳が位置し、この北・東側には小～中型の円墳である大野田1～27・29号墳、王ノ塙古墳、西側には大野田28号墳、五反田古墳、五反田木棺墓、五反田石棺墓、南側には大野田1号木棺墓が分布する。また前期の住居跡が大野田古墳群をはじめ、伊古田遺跡、六反田遺跡、ドノ内遺跡で數軒検出されている。中期の住居跡は、前期と同様に検出例が少なく、これまでに下ノ内遺跡で検出されているほか、大野田地区から北西へ約2km離れた土手内遺跡や、同じく約1km離れた泉崎浦遺跡で検出されている。

古墳時代末期には、郡山低地の東部に多賀城以前の国府である郡山遺跡とその付属寺院である郡山廬寺が造営される。当時、名取川下流域の郡山低地が律令体制下における拠点として重要な地域であったことが窺える。

8世紀前半には多賀城が造営され、8世紀中頃には大野田地区的北東約5kmの広瀬川北岸に陸奥国分寺・國分尼寺が造営される。大野田地区周辺でも、これまでに人野田古墳群のほか、伊古田遺跡、六反田遺跡、元袋遺跡、王ノ塙遺跡などで、奈良時代から平安時代の住居跡や掘立柱建物跡が検出されているが、近年、大野田古墳群から袋前遺跡にかけて発見されている大型の掘立柱建物跡群は注目すべきものである。

中世には、王ノ塙遺跡に大規模な屋敷が造られるほか、大野田古墳群にかけて「奥大道」の可能性のある路面を整備した道路跡が発見されている。



第2図 調査区位置図

第3章 調査の方法と経過

[調査の方法]

調査区の座標は、国家座標（日本測地系・平面直角座標第X系）を基準に設定した。座標杭は5m間隔で打設し、調査区上に一辺5mの正方形グリッドを設定した。座標杭には、X・Y座標値の下三桁をあて、各北西隅部の座標値そのままグリッド呼称として使用した。各グリッドは、それぞれ「X430, Y910区」（X=-198430, Y=3910）のよう表記した。

調査区の掘り下げは、最初の造構検出面であるⅢ層上面付近までは重機を使用し、以下はすべて人力で行った。

遺物の取り上げは、基本的に造構ごとに行ったが、基本層など造構外から出土した遺物については、各グリッド単位で取り上げた。

造構平面図は、トータルステーションを使用して作成した。また、断面図は、手実測と写真実測を併用し、最終的にデジタルデータ（DXF）へ変換した。

写真による記録は、35mmカメラと中判カメラを使用し、それぞれモノクロフィルム、カラーリバーサルフィルムを用いた。また、これと並行して320万画素のデジタルカメラを使用した。

[調査の経過]

Ⅲ層上面では、溝跡、小ピットが検出された。同面での調査を終了したのち、Ⅲ層を人力で掘り下げ、Ⅳ層上面で



第3図 調査区設定図

の遺構検出を試みたが、部分的にIV層の堆積がみられない箇所もあり、遺構は明瞭に確認できなかった。これらの不明瞭な遺構については、Va層上面で再度調査を行うことにし、引き続きIV層を人力で掘り下げた。

Va層上面では、柱列跡、溝跡、小溝状遺構群、土坑、小ピットが検出された。同面での調査を一旦終了したのち、下層調査として調査区中央に10m×5mの試掘区を設定し、遺構の有無を確認しながら人力で徐々に掘り下げを行った。約5cm掘り下げたところで、南東から北西方向へ延びる新たな小溝状遺構群（2群）の存在が確認された。試掘区の内外を再精査した結果、Va層上面の遺構であることは間違いないが、この深さまで掘り下げてはじめてプランが明瞭に確認できるものであることが判明した。これにより、調査区全体を約5cm掘り下げ、再度、遺構検出を行った。その結果、新たに小溝状遺構群、土坑、小ピットが検出されたほか、調査区西側から堅穴住居跡の可能性のある遺構の一部が検出された。同遺構の確認のため、西側を一部拡張して調査を行ったところ、堅穴住居跡であることが判明した。これを受けて、当初、調査対象から除外されていた調査区の西側を拡張することが決定し、引き続き調査を行った。

[下層調査]

遺構調査をすべて終了したのち、さらに下層での遺構・遺物の有無を確認するため、下層調査を実施した。調査区中央に10m×2m、調査区北東際に7m×1mの試掘区を設定し、最終遺構確認面であるVa層からIX層とした砂礫層まで掘り下げを行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。



第4図 下層調査区設定図

第4章 基本層位

調査区には、黄褐色砂質土による盛土が約1mの厚さで盛られている。基本層位は、盛土直下の水田耕作土であるI層から砂礫層であるⅢ層までの大別9層、細別12層が確認されている。

I層：灰色シルト層で、色調の違いによりa・bの2層に細分される。Ia層は盛土が施される直前まで耕されていた現代の水田耕作土、Ib層はそれ以前の水田耕作土である。

II層：黒褐色シルト層で、混入物の有無によりa・bの2層に細分される。IIb層は、基本的にIIa層と同じであるが、にぶい黄褐色シルト（Ⅲ層）の小ブロックが混入する点で違いがみられる。IIa層の下面がほぼ水平な

面をなすのに対し、Ⅱb層の下面は不規則な凹凸面をなしている。Ⅱb層は搅拌された耕作土である可能性が考えられる。

Ⅲ層：にぶい黄褐色シルト層である。調査区の南側を中心に10世紀前半に降下したと考えられる灰白色火山灰がブロック状に少量混入してみられる。本層上面からは、溝跡、ピットが検出されている。層中に遺物を僅かに匂合する。ほかの層例の調査例から、本層は耕作上である可能性も考えられる。

IV層：暗褐色シルト層である。上層による擾拌の影響もあってか、層厚が一样でなく、調査区中央の東側から西側にかけては堆積がみられない。これにより、Ⅲ層直下にVa層が堆積している箇所があり、本層上面では遺構は全く把握できなかった。なお、SD4・5・小溝状遺構群1・3群については、次のVa層上面で調査したものであるが、調査区整際の上層断面観察の結果、本層上面から掘り込まれたものであることが判明している。層中に遺物を少量包含する。本層の下面は不規則な凹凸面をなしていることから、畑耕作土である可能性が考えられる。

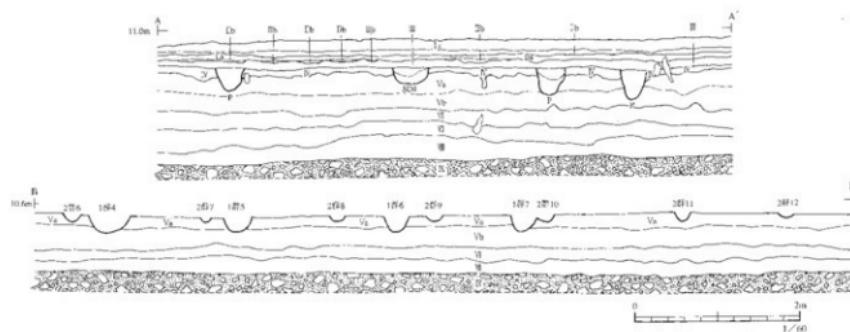
V層：にいぶい黄褐色シルト層で、土性によりa・bの2層に細分される。Va層はシルト、Vb層は砂質シルトである。Va層上面からは、堅穴住居跡、溝跡、小溝状遺構群、土坑、ピットが検出されている。これらの遺構は、大まかに堆積土が暗褐色～黒褐色を呈する一群と、褐灰色～灰黃褐色を呈する一群とに大別できる。前者はVa層の最上面、後者はVa層を僅かに掘り下げた面で検出されている。前者の遺構群については、本来、¹⁴C測定で検出されるべきものであって可能性がある。Va層上面付近から遺物が僅かに出土している。

15層：暗赤色に比較的深まる。炭化物が僅かに混入している。

細胞：細胞壁はヒト細胞である

堆層：灰黃褐色を呈する中砂層である。下層調査の結果、調査区北東側で確認された層であるが、調査区中央では堆積していない。

IV層：砂礫層である。径30~120mmの円礫と粗砂が堆積する。



留出	土色	土性	質	留出	土色	土性	質
Ia	HYR50 黄色	シルト	泥水状潤作土	Va	HYR50cに混じる青色	シルト	
Ib	SYW40 黄色	シルト	泥水状潤作土。地化により黄色に変色する。	Vb	HYR48cに混じる青色	シルト	
Ia	HYR48c 青褐色	シルト	泥水状潤作土。地化により青褐色に変色する。	VI	HYR35 青褐色	シルト	地化物質 $\geq 2-3\text{mm}$ を含む。
Ib	HYR48c 黑褐色	シルト	泥水状潤作土。地化により黒褐色に変色する。	VII	HYR44a 深色	シルト	
II	HYR48c に混じる褐色	シルト	一部は泥水状潤作土。地化により褐色に変色する。	VIII	HYR42 黄褐色	シルト	
IV	HYR48c 黄褐色	シルト		X	-	砂	円粒 $\leq 30-120\text{mm}$

第5図 基本層位

第5章 検出遺構と出土遺物

第1節 Ⅲ層検出の遺構と遺物

Ⅲ層上面からは、溝跡3条、小ビット4基が検出されており、調査区中央から東側にかけて散在してみられる。遺構からの出土遺物は皆無であった。

(1) 溝跡

SD1 溝跡

調査区北側のX435、Y925区に位置する。遺構の重複はない。東西方向へ直線的に延びる細く浅い溝跡である。規模は、全長3.2m、上幅18cm、深さ10cmで、中軸方位はN-85°-Wを示す。溝内の堆積土は、灰色シルトと黒褐色シルトの2層からなり、それぞれ基本層位のIb層とIIa層に該当する。遺物は出土していない。

SD2 溝跡

調査区北側のX435、Y925区に位置する。遺構の重複はない。東西方向へ直線的に延びる細く浅い溝跡で、本溝跡の南側に位置するSD1とは平行関係にある。規模は、全長2.6m、上幅14cm、深さ8cmで、中軸方位はN-85°-Wを示す。溝内には黒褐色シルトが堆積する。遺物は出土していない。

SD1・2は、中軸線間の距離で約1.2mの間隔をおいて平行して検出されている。調査区西壁での土層断面観察の結果、両溝跡はⅡ層上面から掘り込まれたものではなく、Ⅱ層より上の面から減り込んで圧入したものであることが判明している。遺構の形状からみて、荷車などの織跡である可能性が考えられる。出土遺物がないため風風時期は不明であるが、遺構が形成された層位から判断して、近世以降である可能性が高いと思われる。

SD3 溝跡

調査区南東側のX440、Y935区に位置する。遺構の重複はない。東西方向へ直線的に延びる細く浅い溝跡である。中央付近で漸次浅くなり一旦途切れる。規模は、全長2.7m、上幅14cm、深さ6cmで、中軸方位はN-82°-Wを示す。溝内には黒褐色シルトが堆積する。遺物は出土していない。

本溝跡は、単独での検出であるが、前述したSD1・2とは平行関係にあり、同様の性格を有するものと考えられる。

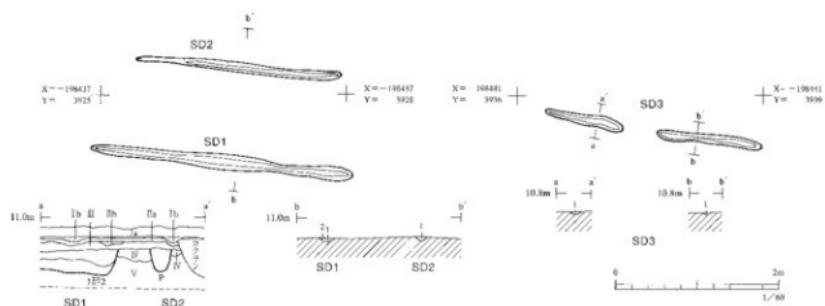
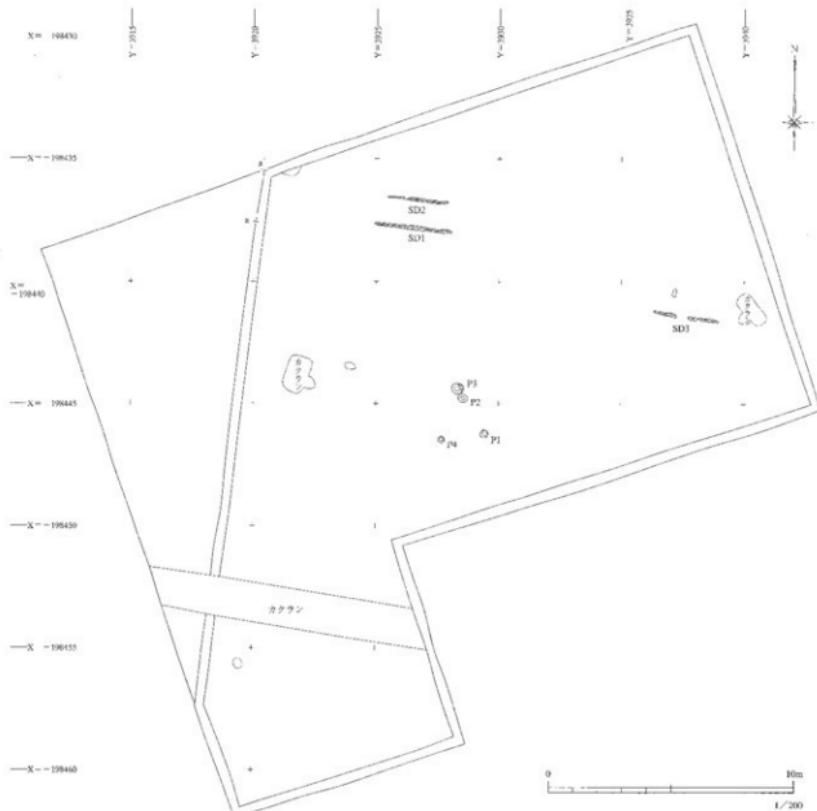
(2) ビット

調査区中央のX445、Y925区から4基の小ビットがまとめて検出されている。いずれも平面形状は円形を呈するもので、掘り込みは浅い。堆積土は、にぶい黄褐色シルトブロックが混じる黒褐色シルトの单層で、柱状跡は確認されなかった。遺物は出土していない。P1~4は近接して位置しているが、建物跡などの存在を示すような有意な配置状況は確認できなかった。

各ビットの平面形状、規模・堆積土などについては第1表に示したとおりである。

遺構 No.	出土位置	平面形状	発見 (cm)			堆積土			柱状跡	出土遺物・実験関係
			横径	縦径	深さ	土色	土性	鉄人物		
P1	X445,Y925	円 素	34	32	12	10YR3/2 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロック #5~10mm少量	無	
P2	X440,Y925	円 素	39	33	9	10YR3/2 黑褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロック #5~10mm少量	無	
P3	X440,Y925	円 素	30	45	12	10YR3/2 黑褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロック #5~10mm少量	無	
P4	X445,Y925	円 素	29	28	10	10YR3/2 黑褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロック #5~10mm少量	無	

第1表 Ⅲ層検出ビット観察表



測線	位置	土色	土性	備考	測線	位置	土色	土性	備考
SD1	1	SY61 黄色	シルト	(1b弱)	SD2	1	JOYR/2 黄褐色	シルト	に赤い斑点色シルト粒子 #2~3mm少量 (0.0%)
SD1	2	JOYR/2 黄褐色	シルト	に赤い斑点色シルト粒子 #2~3mm少量 (0.0%)	SD3	1	JOYR/2 黄褐色	シルト	に赤い斑点色シルト粒子 #2~3mm少量 (0.0%)

第6図 III層構造

第2節 V層検出の遺構と遺物

V層上部からは、堅穴住居跡1軒、柱列跡2列、溝跡4条、小溝状遺構群3群、土坑9基、小ビット166基が検出されている。各遺構は、重複しながら、調査区のほぼ全域から検出されている。

(1) 堅穴住居跡

S11 堅穴住居跡

【位置・重複】 調査区北西側のX435・440、Y915・920区に位置する。SA1・2、小溝状遺構群1・3群、SK9に切られる。

【形態・規模・方向】 平面形状は南北にやや長い方形を呈する。規模は、東西4.4m、南北4.6m、残存壁高22cmで、南北方向の中軸方位はN-28°-Wを示す。

【堆積土】 6層に大別される。1~4層は住居内堆積土、5層は掘り方埋土、6層はビット埋土である。

【床面】 ほぼ平坦で、特に硬化的箇所はみられない。掘り方は、床面中央と東・南・北側の隙間を除いて、不整形な環状に掘り込まれている。床面からの深さは、南東側が約5cmと浅く、北西側が約16cmとやや深い。埋土は褐灰色シルトの單層である。

【柱穴】 床面上では確認できなかったが、掘り方の下面から浅く小さな凹みがほぼ方形配列のかたちで4箇所検出されている。柱痕跡などは確認されていないが、柱穴の可能性がある。

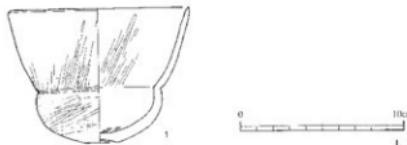
【周溝】 検出されなかった。

【火】 床面の中央やや北寄りから浅い凹みが1箇所検出されている。平面形状は楕円形を呈し、断面形は浅い皿状となる。規模は、長径70cm、短径56cm、深さ8cmである。遺構内には、焼土粒子を多量に含む灰黄褐色シルトが堆積する。被熱による地山の焼土化はみられないが、火跡の可能性が考えられる。

【その他】 南東隅部から土坑が1基検出されている。平面形状は楕円形を呈するもので、底部はやや凹凸が目立つ。規模は、長径84cm、短径52cm、深さ25cmである。土坑内には、住居内堆積土である2・3層が堆積する。

【出土遺物】 遺物は、3層を中心に土師器の縞片が少量出土しているほか、南東側の隙間から完形品の土師器鉢（C1）が1点出土している。同遺物は、ほぼ正位で出土したものであるが、床面からは約3cm浮いた状況で出土している。

C1（第7図1）は浅い偏球形の体部をもち、頸部で「く」の字状に屈曲したのち、口縁部が僅かに内湾しながら開く器形となる。体部と口縁部の器高比は約2:3である。器面調整は、口縁部内外面が縦位ヘラミガキ、体部外面がヘラケズリのち横～斜位ヘラミガキ、内面がヘラナデである。底部は指頭で小さく凹ませて上げ底状とする。器形の特徴から、古墳時代前期の塩釜式期の土器と考えられる。

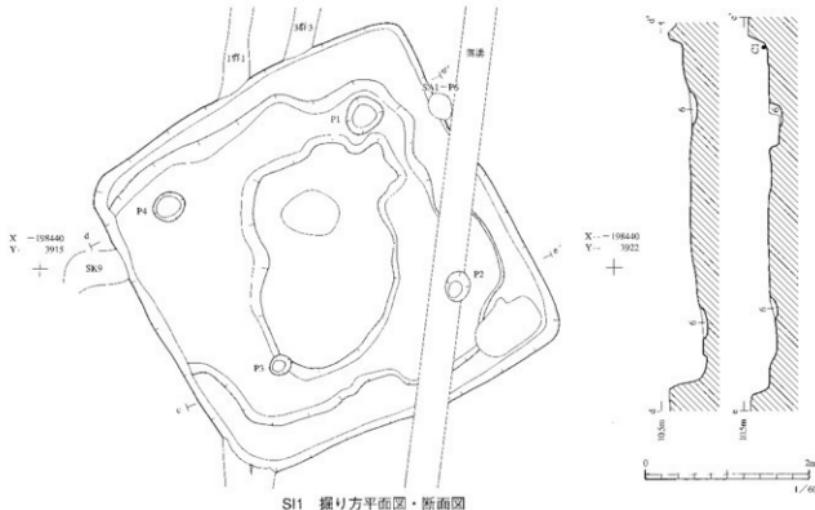
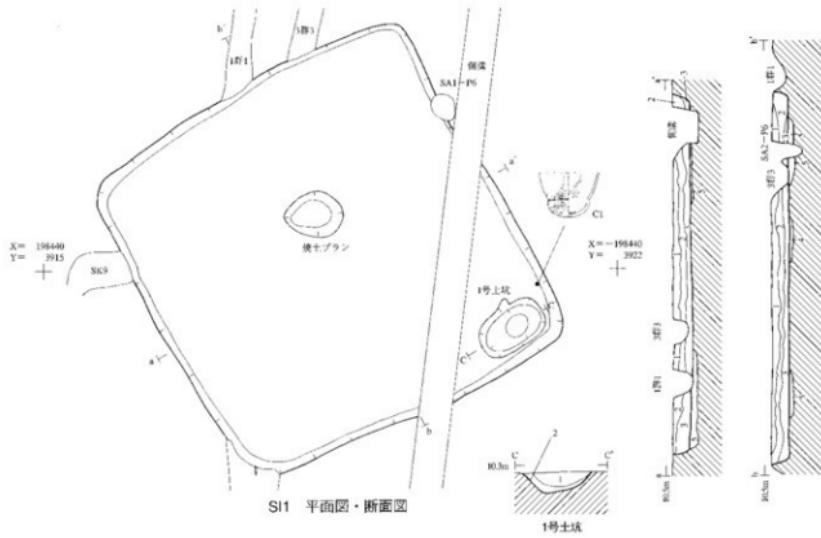


査定番号	器種	出土地区	出土層位	基準	基長	口径×底径×高さ [mm]	外置測定	内置測定	底面調整	底位部位・内面	写真写真 名
I	C1	S11	3	上鉢部	鉢	110×20×81	口：縦位ヘラミガキ、 底：横位ヘラミガキ、 側：ヘラケズリのち横～斜位 ヘラミガキ	底：縦位ヘラミガキ、 体：ヘラナデ	凹み	9.65	II-6

第7図 S11出土遺物



第8図 V層構造配置図



道種	性別	十性	個性	備考	出現	符號	土色	土性	健才
SH	1	10YR4/2	灰色褐色	シルト	SH	4	10YR4/2	灰褐色	シルト 土粒子 $\pm 1-4mm$ 多量
	2	10YR4/3	ない青褐色	シルト		5	10YR4/1	褐灰色	シルト 地盤力強
	3	10YR4/2	灰褐色	シルト		6	10YR4/1	灰褐色	シルト $\mu\sim 4-1$

第9図 SI1

(2) 柱列跡

SA1 柱列跡

調査区北側のX435、Y915～940区に位置する。SI1、SD5、小溝状遺構群1～3群を切る。柱穴状を呈する7基のピットが、一定の間隔をおいて、ほぼ一直線上に並んで検出されている。東西方向へ伸びるもので、両端はさらに調査区外へ続くものと予想される。確認された全長（P1～7の心々距離）は25.0mで、中軸方位はN-89°-Wを示す。各ピットの間隔は、心々距離で4.2m前後である。ピットの平面形状は円形で、規模は、径24～43cm、深さ28～64cmである。いずれも堆積土は黒褐色シルトの単層で、柱痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。

SA2 柱列跡

調査区北側のX435、Y910～940区に位置する。SI1、SD5、小溝状遺構群2・3群を切る。SA1と同様の遺構で、柱穴状を呈する7基のピットが、一定の間隔をおいて、ほぼ一直線上に並んで検出されている。東西方向へ伸びるもので、両端はさらに調査区外へ続くものと予想される。確認された全長（P1～7の心々距離）は25.0mで、中軸方位はSA1同様N-89°-Wを示す。各ピットの間隔は、心々距離で4.2m前後である。ピットの平面形状は円形で、規模は径21～39cm、深さ25～51cmである。いずれも堆積土は黒褐色シルトの単層で、柱痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。

SA1・2は、中軸線間の距離で40cm程の間隔をおいて平行して検出されている。両柱列跡は、ほとんど擦り合うよう平行して並んでおり、各ピットはそれぞれ互い違いに位置している。SA1とSA2は、ほぼ同一規格であることから単純に取り替える可能性も考えられるが、意図的に交互に配したようなピットの配列状況からみると、相互に関連した一連の遺構である可能性も否定できない。出土遺物がないため培養時期は不明であるが、遺構の重複関係からみて、ともに本検出面におけるもっとも新しい時期の遺構の一つと考えられる。

No.	平面形状	規模(cm)			ピット間の 距離(m)	遺構関係・備考	No.	平面形状	規模(cm)			ピット間の 距離(m)	遺構関係・備考
		直径	半径	深さ					直径	半径	深さ		
SA1-P1	円形	25	12.5	51	—	SD5より新しい	SA2-P1	円形	39	19.5	47	—	SD5より新しい
SA1-P2	円形	38	19	46	4.5		SA2-P2	円形	21	10.5	42	4.2	小溝群2群1より新しい
SA1-P3	円形	43	21.5	54	4.0	SD5、小溝群2群1より新しい	SA2-P3	円形	33	16.5	51	3.9	小溝群2群2より新しい
SA1-P4	円形	43	21.5	64	4.0	SD5より新しい	SA2-P4	円形	33	16.5	44	4.3	SD5より新しい
SA1-P5	円形	30	15	51	4.1		SA2-P5	円形	28	14	51	4.2	SD5より新しい
SA1-P6	円形	36	18	46	4.1	SH1、小溝群3群2より新しい	SA2-P6	円形	27	13.5	40	4.0	SH1、小溝群3群1より新しい
SA1-P7	円形	30	15	28	4.2	小溝群3群2より新しい	SA2-P7	円形	29	14.5	25	4.5	小溝群3群1より新しい

第2表 SA1・2ピット観察表

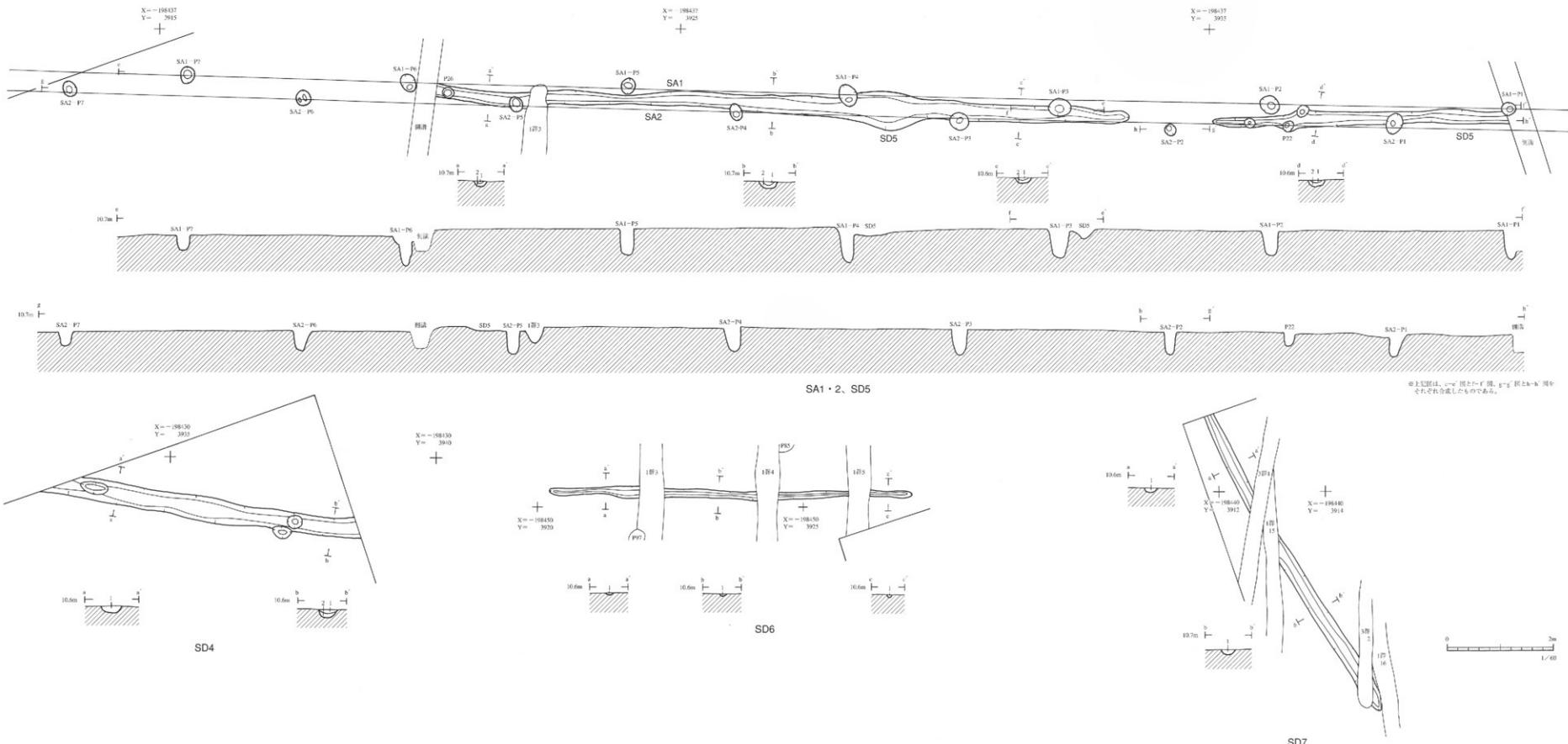
(3) 溝跡

SD4 溝跡

調査区北東側のX430、Y930・935区に位置する。遺構の重複はない。東西方向へ直線的に伸びる溝跡で、両端はさらに調査区外へ続いている。断面形は半円状を呈する。確認された規模は、全長6.4m以上、上幅47cm、深さ14cmで、中軸方位はN-82°-Wを示す。堆積土は2層に大別される。ともに暗褐色シルトであるが、下層にはにぶい黄褐色シルトブロックが混入する。中央から西側にかけては後者の堆積はみられない。遺物は出土していない。

SD5 溝跡

調査区北側のX435、Y920～940区に位置する。SA1・2、小溝状遺構群1群、P21・22・26に切られ、小溝状遺構群2群、SK1・7、P19・137・154を切る。東西方向へ直線的に伸びる溝跡で、途中で一旦浅くなり途切れる。両端はさらに調査区外へ続いている。断面形は弧状を呈する。確認された規模は、全長20.2m以上、上幅38cm、深さ11cmで、中軸方位はN-89°-Wを示す。堆積土は、暗褐色シルトと褐色シルトの2層に大別される。遺物は出土していない。



第10図 SA1・2, SD4~7

連排	段位	土色	土性	参考	連排	段位	土色	土性	参考
SD4	1	10YR 3/3 非粘土 シルト	3M3	2 10YR 4/4 可塑性 シルト	SD5	2	10YR 4/4 可塑性 シルト		
	2	10YR 3/3 非粘土 シルト		にふく質乳化シルトブロック 10~20mm少部	SD6	1	10YR 4/4 可塑性 シルト		
SD5	1	10YR 3/3 可塑性 シルト(にふく質乳化シルトブロック 10~20mm少部)	3M7		SD7	1	10YR 4/4 可塑性 シルト		

なお、SD4・5は、V層上面で調査したものであるが、調査区壁際の土層断面観察の結果、IV層上面から掘り込まれたものであることが判明している。

SD6 溝跡

調査区南側のX445、Y920・925区に位置する。小溝状遺構群1群に切られ、小溝状遺構群2群を切る。東西方向へ直線的に延びる細く浅い溝跡である。規模は異なるが、本溝跡の北側に位置するSD5とは平行関係にある。断面形は弧状を呈する。規模は、全長6.8m、上幅22cm、深さ5cmで、中軸方位はN-89°-Wを示す。堆積土は暗褐色シルトの单層である。遺物は出土していない。

SD7 溝跡

調査区北西側のX435・440、Y910区に位置する。小溝状遺構群1・3群に切られる。南東から北西方向へ直線的に延びる溝跡で、北端はさらに調査区外へ続いている。断面形は半円状を呈する。確認された規模は、全長6.4m以上、上幅30cm、深さ9cmで、中軸方位はN-30°-Wを示す。堆積土は灰黄褐色シルトの单層である。遺物は出土していない。SD7は、調査区北東端から断片的に検出されているため、単独の溝跡として取り扱ったが、さらに西側へ連続して小溝状遺構群を形成している可能性もある。

(4) 小溝状遺構群

小溝状遺構群1群

調査区東側から西側にかけてのX430～455、Y910～940区に位置する。SA1、小溝状遺構群3群、P86に切られ、SI1、SD5～7、小溝状遺構群2群、SK3・4のはか多くのピットを切る。南北方向に延びる16条の小溝が平行して検出されている。東・西端はさらに調査区外へ続いているため全貌は明らかでないが、東へ向かって小溝が順次短くなっていく傾向がみえる。なお、東端で検出されている1群14は、調査区南壁の土層断面で確認されたもので、壁際の偏溝中に途切れていることから平面図には示していない。確認された小溝の規模は、全長19.4m以上、上幅35cm前後、深さ30cm前後で、中軸方位はN-3°-W前後を示す。各小溝の間隔は、心々距離で1.9m前後であるが、東側でやや狭く西側でやや広い傾向がみられる。堆積土は2層に大別される。ともに黒褐色シルトであるが、下層にはぶい黄褐色シルトブロックが多量に混入している。遺物は、縄文土器、土師器、剝片が僅かに出土している。

A1(第11図1)は1群10から出土した縄文土器である。深鉢の口縁～体部片で、単節LRの縄文原体を縦・横方向へ回転施文して粗雑な羽状縄文を描出する。内面は丁寧なナデが施される。

C2(第11図2)は1群1から出土した土師器の鉢である。偏球形の体部をもつもので、内外面に赤彩が施される。体部内外面の調整は横～斜めヘラミガキである。底部は指頭で小さく凹ませて上げ底状とする。



探査 番号	登録 番号	出土地区	出土 部位	種類	名種	口径×底径×高さ (mm)	外觀調整	内面調査	底面調査	遺在部位・備考	写真回数 番号
1	A1	小溝群(群10 X+0,Y900)	I V	縄文土器	深鉢	-×-×-	單節LRの純文原体を縦・横 方向へ回転施文し、粗雑な 部位斜めヘラミガキを施用	ナデ	-	口縁～体部片	II-1
2	C2	小溝群1群1	2	土師器	鉢	-×16×-	体：横・斜めヘラミガキ 底：横・斜めヘラミガキ	明み 底部片	内面赤彩	II-7	

第11図 小溝状遺構群1群出土遺物

小溝状遺構群2群

調査区中央から東側にかけてのX430～450, Y920～940区に位置する。SA1・2, SD5・6、小溝状遺構群1群、SK2・5～7のほか多くのピットに切られ、P94を切る。南東から北西方向へ延びる18条の小溝が平行して検出されている。東・南端はさらに調査区外へ続いており、全貌は不明である。確認された小溝の規模は、全長13.0m以上、上幅20cm前後、深さ8cm前後で、中軸方位はN-32°～W前後を示す。各小溝の間隔は心々距離で1.4m前後である。堆積土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。

本遺構は、V層上向を僅かに掘り下げた面で検出されている。同層上面から掘り込まれた遺構であることは間違いないが、堆積土が地山に近似した淡い色調を呈することもあり、この深さまで掘り下げてはじめてプランが明瞭に確認できたものである。

小溝状遺構群3群

調査区北東側のX435・440, Y910・915区に位置する。SA1・2に切られ、SI1, SD7、小溝状遺構群1群を切る。ほぼ南北方向に延びる3条の小溝が平行して検出されている。西・北端はさらに調査区外へ続いており、全貌は不明である。確認された小溝の規模は、全長8.5m以上、上幅38cm前後、深さ31cm前後で、中軸方位はN-8°～E前後を示す。各小溝の間隔は心々距離で2.6m前後である。小溝底面には南側を中心に僅かに掘削痕が確認できる。堆積土は2層に大別される。ともに黒褐色シルトであるが、下層にはにぶい黄褐色シルトブロックが多量に混入している。遺物は出土していない。

検出された3つの小溝状遺構群は、遺構の切り合いから、(古)2群⇒1群⇒3群(新)の順で新旧関係が確認されている。なお、小溝状遺構群1・3群については、V層上面で調査したものであるが、調査区崖際の土層断面観察の結果、IV層上向から掘り込まれたものであることが判明している。

(5) 土坑

SK1 土坑

調査区東側のX435, Y935区に位置する。SD5に切られる。平面形状は楕円形を呈する。規模は、長径75cm、短径51cm、深さ29cmである。堆積土は暗褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SK2 土坑

調査区東側のX440, Y930区に位置する。小溝状遺構群2群を切る。平面形状は楕円形を呈する。規模は、長径82cm、短径58cm、深さ44cmである。堆積土は暗褐色シルトと褐色シルトの2層に大別される。遺物は出土していない。

SK3 土坑

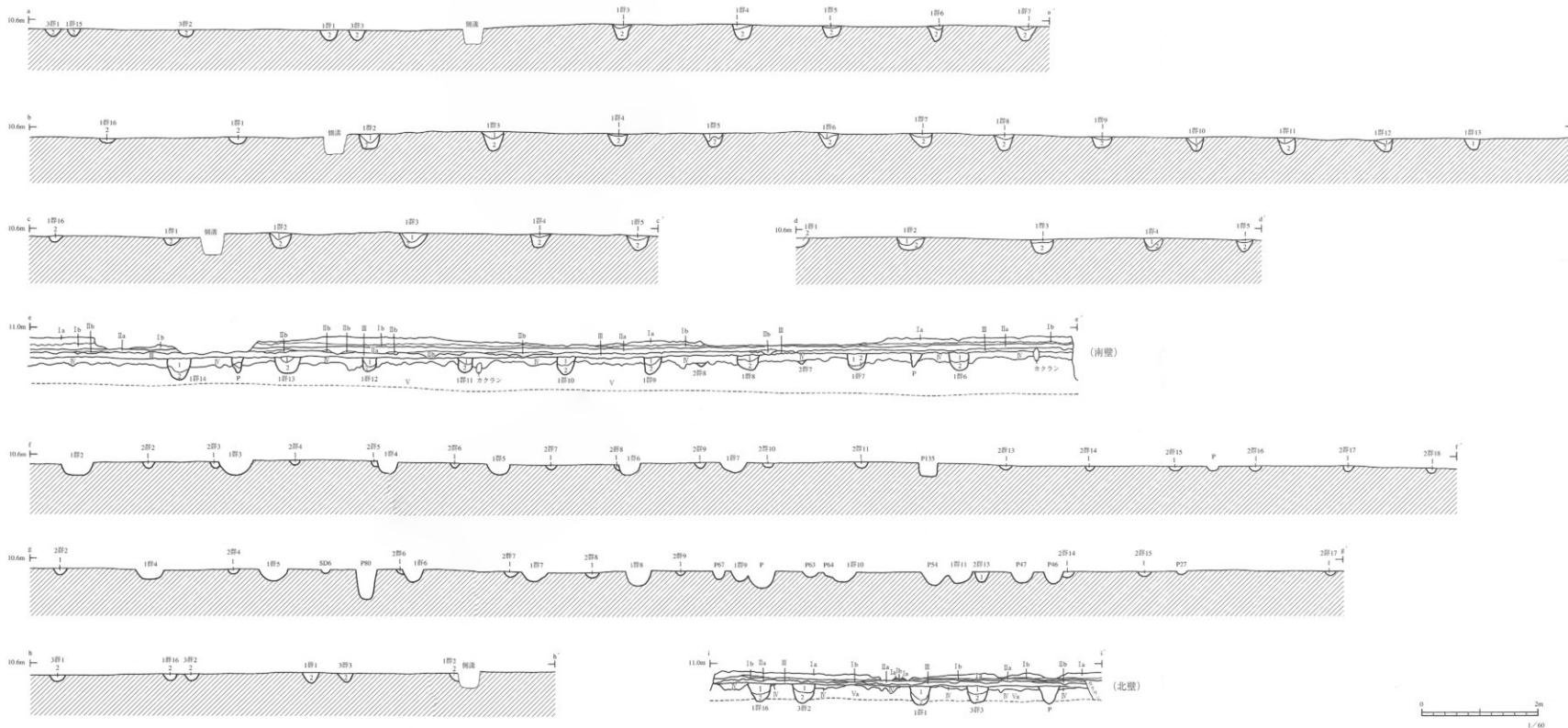
調査区中央のX445, Y925区に位置する。小溝状遺構群1群に切られる。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。規模は、長径65cm以上、短径50cm、深さ55cmである。堆積土は、暗褐色シルトと褐色シルトの2層に大別される。遺物は出土していない。

SK4 土坑

調査区西側のX445, Y920～925区に位置する。小溝状遺構群1群に切られる。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。規模は、長径73cm以上、短径52cm、深さ38cmである。堆積土は暗褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SK5 土坑

調査区西側のX445, Y920区に位置する。小溝状遺構群2群を切る。平面形状は円形を呈する。規模は、長径64cm、短径60cm、深さ43cmである。堆積土は暗褐色シルトと褐色シルトの2層に大別される。遺物は出土していない。

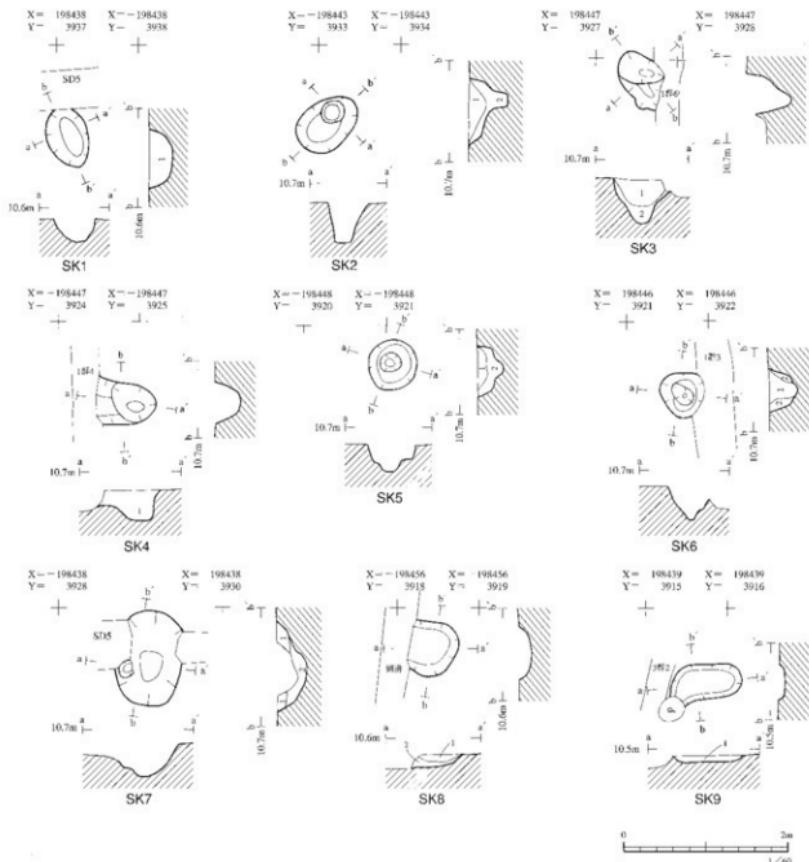


第12図 小溝状遺構群

遺構	層位	土色	土性	施劳	遺構	層位	土色	土性	備考
小溝群1群	1	10YR4/2 黒褐色	シルト		1	10YR3/2 黒褐色	シルト		
	2	[に]10YR3/2 黒褐色	シルト	[に]10YR3/2 黑褐色シルトプロック #10~30mm多量	小溝群3群	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	[に]10YR3/2 黑褐色シルトプロック #10~20mm多量
小溝群2群	1	10YR4/2 黒褐色	シルト						

SK6 土坑

調査区西側のX445, Y920区に位置する。小溝状造構群1群に切られ、2群を切る。平面形状は円形を呈する。規模は、長径55cm、短径46cm以上、深さ43cmである。堆積土は暗褐色シルトと褐色シルトの2層に大別される。遺物は出土していない。



遺構	層位	土色	土性	備考	遺構	層位	土色	土性	備考
SK1	1	10YR3/4 暗褐色	シルト		SK6	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	
SK2	1	10YR3/3 暗褐色	シルト		2	10YR4/4 褐色	シルト		
SK2	2	10YR4/4 褐色	シルト		SK7	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	
SK3	1	10YR3/3 暗褐色	シルト		2	10YR4/4 褐色	シルト		
SK4	1	10YR3/5 黄褐色	シルト		SK8	1	2.5Y4/1 黄褐色	シルト	に古い黄褐色シルトブロック $\pm 10\text{--}20\text{mm}$ 少部
SK4	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	に古い黄褐色シルトブロック $\pm 10\text{--}30\text{mm}$ 少部	SK9	1	10YR4/2 底灰褐色	シルト	漂土粒子 $\pm 2\text{--}4\text{mm}$ 高密度
SK5	1	10YR3/3 暗褐色	シルト						
SK5	2	10YR4/4 褐色	シルト						

第13図 SK1~9

SK7 土坑

調査区東側のX435、Y925区に位置する。SD5に切られ、小溝状遺構群2群を切る。平面形状は楕円形を呈する。規模は、長径1.2m、短径63cm以上、深さ40cmである。堆積土は暗褐色シルトと褐色シルトの2層に大別される。遺物は出土していない。

SK8 土坑

調査区南西側のX455、Y915区に位置する。遺構の重複はない。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。規模は、長径67cm、短径57cm以上、深さ17cmである。堆積土は2層に大別される。ともに黄灰色シルトであるが、下層にはにぶい黄橙色シルトブロックが混じる。遺物は出土していない。

SK9 土坑

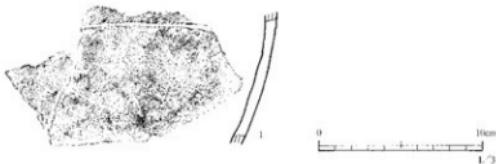
調査区北西側のX435・440、Y915区に位置する。SI1を切る。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。規模は、長径88cm、短径44cm、深さ8cmである。堆積土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。

(6) ピット

調査区の南北側を中心に166基(P5~170)が検出されている。平面形状は円形または楕円形を呈するもので、いずれも柱痕跡は確認されなかった。また、建物跡などの存在を示すような有意な配置状況は確認できなかった。これらのピットについては、何かしらの建物跡を構成する可能性がある反面、IV層土壌同様に耕作によるものであることも考えられる。遺物は、僅かであるがP13・15から土器部、P134から縄文土器(A2)が出土している。

A2(第14図1)は、深鉢の体部片で、上部は弦線で区画された縄文帯、その下はハラミガキが施されて無文となる。内面は粗いナデが施される。縄文時代後期の土器と思われるが、細片のため詳細は不明である。

各ピットの平面形状・規模・堆積土などについては第3~5表に示したとおりである。



開拓番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	特徴	口径×底径×高さ (mm)	外表面質	P.I.実測値	底部測定	遺構指標・備考	参考開拓番号
1	A2	P134	I	縄文土器	深鉢	-×-×	洗浄で表面あわたれ押文面。手の印はハラミガキが施されて無文となる	縄文	-	全体片	II-2
		X445.Y930	II								

第14図 P134出土遺物

番号 No.	出土地区	平面形状	深度 (cm)		成層土	透入物	有機物	出土物・遺物関係
			表層	反対				
P5	X430,Y935	円 形	34	48	20	10YR5/3 黒褐色	シルト	無
P6	X430,Y935	種別形	51	35	31	10YR5/2 黒褐色	シルト	無
P7	X430,Y935	種別形	39	25	19	10YR5/2 黒褐色	シルト	無
P8	X430,Y935	種別形	39	27	17	10YR5/3 黒褐色	シルト	無
P9	X430,Y935	種別形	36	27	26	10YR5/3 黒褐色	シルト	無
P10	X435,Y935	円 形	43	39	24	10YR5/3 黒褐色	シルト	無
P11	X435,Y930-935	円 形	39	35	40	10YR5/2 黒褐色	シルト	無 小溝跡2群より新しい
P12	X430,Y930	種別形	37	27	27	10YR5/3 黒褐色	シルト	無
P13	X430,Y925	種別形	57	46	18	10YR5/0 黒褐色	シルト	無 十字路跡出土
P14	X430,Y925	円 形	32	30	20	10YR5/0 黒褐色	シルト	無
P15	X430,Y925	種別形	42	33	26	10YR5/0 黒褐色	シルト	無 十字路跡出土
P16	X435,Y925	種別形	48	37	18	10YR5/0 黒褐色	シルト	無 風洞本跡より新しい
P17	X435,Y925	円 形	29	26	26	10YR5/0 黒褐色	シルト	無
P18	X435,Y925	円 形	27	23	18	10YR5/0 黒褐色	シルト	無
P19	X435,Y935	円 形	25	21	37	10YR5/0 黒褐色	シルト	無 SDSより古い
P20	X435,Y935	種別形	26	21	25	10YR5/0 黒褐色	シルト	無
P21	X435,Y935	円 形	25	21	24	10YR5/0 黒褐色	シルト	無 SDSより新しい
P22	X435,Y935	円 形	21	19	25	10YR5/0 黒褐色	シルト	無 SDSより新しい
P23	X435,Y920	種別形	37	28	13	10YR5/0 黒褐色	シルト	無
P24	X435,Y920	種別形	38	30	23	10YR5/0 黒褐色	シルト	無
P25	X435,Y920	円 形	33	26	32	10YR5/0 黒褐色	シルト	無
P26	X435,Y920	種別形	23	19	21	10YR5/0 黒褐色	シルト	無 SDSより新しい
P27	X440,Y935	円 形	20	19	22	10YR5/0 黑褐色	シルト	無
P28	X440,Y935	種別形	35	22	16	10YR5/3 黑褐色	シルト	無
P29	X440,Y935	円 形	24	23	24	10YR5/0 黑褐色	シルト	無 SDSと重複
P30	X440,Y935	円 形	26	22	23	10YR5/0 黑褐色	シルト	無 SDSと重複
P31	X440,Y935	種別形	39	25	25	10YR5/0 黑褐色	シルト	無
P32	X440,Y935	種別形	37	24	44	10YR5/0 黑褐色	シルト	無
P33	X440,Y930	円 形	31	26	34	10YR5/0 黑褐色	シルト	無
P34	X440,Y930	種別形	52	40	23	10YR5/0 黑褐色	シルト	無
P35	X440-445,Y940	種別形	47	28	18	10YR5/3 黑褐色	シルト	無
P36	X440,Y940	種別形	52	38	13	10YR5/0 黑褐色	シルト	無
P37	X445,Y935	円 形	43	37	23	10YR5/3 黑褐色	シルト	無
P38	X440,Y935	種別形	49	36	29	10YR5/0 黑褐色	シルト	無 小溝跡1帯より古い
P39	X440,Y935	種別形	82	25	24	10YR5/0 黑褐色	シルト	無 小溝跡2帯より新しい
P40	X440,Y935	種別形	99	59	35	10YR5/1 黑褐色	シルト	無 小溝跡1帯より古い
P41	X440,Y935	種別形	42	33	21	10YR5/0 黑褐色	シルト	無 小溝跡2帯より新しい
P42	X440,Y935	種別形	40	28	34	10YR5/1 黑褐色	シルト	無 小溝跡2帯より新しい
P43	X440,Y935	種別形	64	36	28	10YR5/0 黑褐色	シルト	無
P44	X440,Y935	種別形	47	31	24	10YR5/3 黑褐色	シルト	無
P45	X440,Y935	種別形	76	48	23	10YR5/0 黑褐色	シルト	無
P46	X440,Y935	円 形	34	31	20	10YR5/0 黑褐色	シルト	無 小溝跡2帯より新しい
P47	X440,Y935	種別形	51	37	21	10YR5/0 黑褐色	シルト	無
P48	X440,Y935	円 形	48	43	42	10YR5/0 黑褐色	シルト	無 小溝跡1帯より古い
P49	X440,Y935	円 形	39	33	28	10YR5/0 黑褐色	シルト	無
P50	X445,Y935	円 形	51	45	47	10YR5/0 黑褐色	シルト	無 小溝跡2帯より新しい
P51	X445,Y935	種別形	31	24	46	10YR5/0 黑褐色	シルト	無
P52	X445,Y935	円 形	28	26	37	10YR5/0 黑褐色	シルト	無
P53	X445,Y935	種別形	37	44	30	10YR5/0 黑褐色	シルト	無 小溝跡2帯より新しい
P54	X440,Y935	種別形	53	39	47	10YR5/0 黑褐色	シルト	無 小溝跡1帯より古い
P55	X440,Y935	円 形	36	27	22	10YR5/0 黑褐色	シルト	無 小溝跡1帯より古い
P56	X440,Y930	種別形	63	48	51	10YR5/0 黑褐色	シルト	無
P57	X440,Y930	種別形	39	29	35	10YR5/0 黑褐色	シルト	無 小溝跡1帯より古い
P58	X445,Y935	円 形	34	30	28	10YR5/0 黑褐色	シルト	無
P59	X445,Y935	種別形	94	43	36	10YR5/0 黑褐色	シルト	無

第3表 V層検出ピット観察表 (1)

老若 No.	出生地区	年齢(状態)	表面				潜伏土	潜伏跡	山下遺物・墓窓用例
			長径	短径	深さ	土色			
P61	X445,Y930	掘円形	63	37	31	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P62	X443,Y930	円 形	54	46	36	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P63	X445,Y930	掘円形	50	37	22	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群10より古い
P64	X440,Y930	—	—	13	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群10より古く、P133より新しい	
P65	X440,Y930	円 形	35	30	18	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群2群11より新しい
P66	X440,Y930	円 形	40	34	28	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群9より古く、小湊群2群11より新しく
P67	X445,Y930	掘円形	34	23	20	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P68	X445,Y930	—	—	20	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群9より古く、小湊群2群9より新しい	
P69	X445,Y930	掘円形	64	44	14	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	P106より新しい
P70	X445,Y930	—	—	14	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群8、P96より古い	
P71	X445,Y930	—	—	22	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群8より古く、小湊群2群8より新しい	
P72	X445,Y930	掘円形	58	46	27	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P73	X445,Y930	—	—	11	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群8より古く	
P74	X440,Y930	円 形	27	26	44	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群8より古く
P75	X440,Y923	掘円形	49	31	24	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群2群8より新しい
P76	X445,Y925	掘円形	35	25	30	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P77	X445,Y925	掘円形	38	25	35	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群8より古く、小湊群2群7より新しい
P78	X445,Y925	円 形	53	39	28	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P79	X445,Y925	掘円形	32	26	19	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P80	X445,Y925	円 形	41	38	51	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P81	X445,Y925	—	55	46	34	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群5より古い
P82	X450,Y920	円 形	44	39	47	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P83	X445,Y925	掘円形	48	35	22	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P84	X445,Y925	円 形	35	30	31	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P85	X445,Y920	—	—	21	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群42より古く、小湊群2群4、P125より新しい	
P86	X445,Y925	円 形	30	26	19	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群5より古く
P87	X445,Y925	掘円形	45	33	24	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P88	X440,Y920	掘円形	45	36	34	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群4より古く、小湊群2群6より新しく
P89	X440,Y925	掘円形	42	27	19	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群5より古く
P90	X440,Y925	円 形	29	24	31	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群5より古く
P91	X440,Y925	円 形	28	27	21	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P92	X435,Y920	掘円形	60	25	25	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P93	X435,Y925	円 形	33	30	21	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P94	X445,Y920	掘円形	41	32	42	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群2群4より古く
P95	X445,Y920	掘円形	46	28	49	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群2群3より古く
P96	X445,Y920	円 形	44	38	31	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P97	X450,Y920	円 形	33	28	31	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群1より古く、小湊群2群1より新しい
P98	X450,Y920	掘円形	55	34	19	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群3より古く
P99	X450,Y915	掘円形	54	38	20	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P100	X435,Y920	円 形	25	23	27	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P101	X440,Y920	掘円形	39	26	18	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群3より古く
P102	X450,Y915	円 形	34	27	45	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	小湊群1群2より古く
P103	X455,Y915	掘円形	42	35	28	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P104	X455,Y915-920	掘円形	40	30	33	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P105	X455,Y920	掘円形	49	40	23	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P106	X455,Y920	—	—	—	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無		
P107	X455,Y925	掘円形	53	39	26	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P108	X455,Y920	掘円形	87	51	25	10YR3/3 黒褐色	シルト	無	
P109	X455,Y920	掘円形	82	36	30	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P110	X460,Y920	円 形	33	28	22	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P111	X455,Y920	掘円形	47	43	30	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P112	X455,Y915	掘円形	46	37	16	10YR3/3 黒褐色	シルト	無	
P113	X455,Y920	円 形	32	31	17	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P114	X455,Y920	円 形	48	43	27	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P115	X455,Y920	掘円形	48	30	18	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	
P116	X440,Y915	掘円形	33	22	36	10YR3/3 嫌褐色	シルト	無	

第4表 V層検出ピット観察表 (2)

第5表 V層検出ピット閾値表 (3)

第3節 基本層出土の遺物

基本層位Ⅰ～Ⅸ層のうち、遺物の出土が確認されたのはⅢ～Ⅴa層である。全体に出土量は少ないが、縄文時代から古代にかけての遺物が出土している。Ⅲ層からは土師器、Ⅳ層からは縄文土器、弥生土器、土師器、平瓦、石器、Ⅴa層からは縄文土器、弥生土器、土師器、石器が出土している。出土点数は、Ⅲ層が5点、Ⅳ層が135点、Ⅴa層が20点である。これらの遺物のうち、もっとも出土量が多いのは土師器であるが、確認可能な個体をみる限り、すべて非クロロ土師器である。各層からの出土遺物は、いざれも時期的に混在した状況で出土しており、時期差を示すような層位的な出土状況は確認できなかった。なお、Ⅴa層から出土した遺物については、いざれも上面付近から検出されたものであり、木米、Ⅳ層中に含まれるべきものであった可能性がある。

ここでは、Ⅳ・Ⅴa層から出土した特徴的な9点の遺物について図示する。

A3（第15図1）は縄文土器である。深鉢の底部片で、脚部外面には単節LRによる斜行縄文が施文される。

B1・2（第15図2・3）は弥生土器である。B1は高杯の脚部片である。範描文によって装飾されるもので、器面には丁寧なヘラミガキが施される。前期後半の山王Ⅱ層式土器と思われる。B2は鉢の口縁部片である。細く浅い範描線によって文様が描出されるもので、中期中頃の柳形圓式土器と思われる。

C3（第15図4）は土師器の鉢である。浅い偏球形の体部をもち、頸部で「く」の字状に屈曲する。摩滅により器面調整は不明である。底部は指頭で小さく凹ませて上げ底状とする。SH1から出土したC1に近似するもので、古墳時代前期の堆積式期と考えられる。

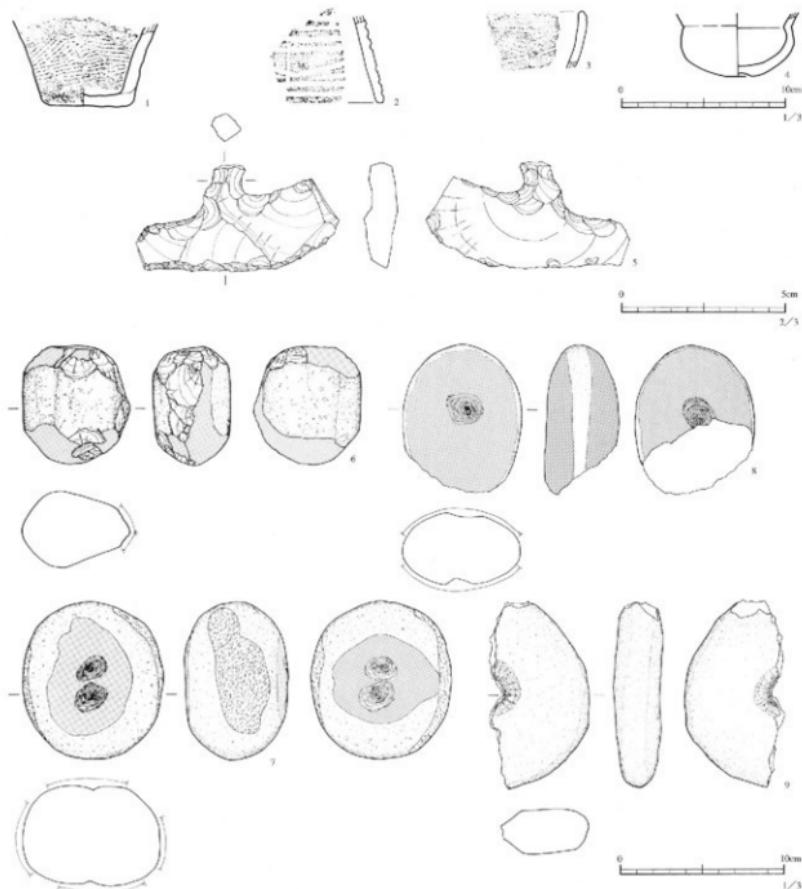
Ka1（第15図5）は剥片石器である。いわゆる斜刃型に近い形状をもつ石器で、刃縁にはにぶい光沢をともなう磨耗痕がみられる。つまみ部先端と刃部両端を欠損する。ガラス質安山岩製。

Kc1～4（第15図6～9）は藤石器である。Kc1は用途不明の石器である。角柱状の自然縛を素材とするもので、上下端および右側縁の稜角に打撃による剥離を施したのち、その部分を磨っている。流紋岩製。Kc2は、やや扁平な円縛を素材とするもので、正裏面中央に磨痕と2個一对の凹痕、両側縁に敲打痕がみとめられる。安山岩製。Kc3は、扁平な円縛を素材とするもので、正裏面に磨痕と凹痕がみとめられる。下端約1/3を欠損する。安山岩製。Kc4は、扁平な円縛を素材とするもので、正裏面中央に凹痕がみとめられる。全体の約1/2を欠損する。安山岩製。

ほかに、細片のため図示していないが、Ⅳ層（X440、Y935区）から平瓦が1点出土している。凹面に布目压痕が残るもので、焼成は未還元である。古代のものとみられる。

基木層・遺物名	縄文	張番	土師器		瓦		石 器		合計点数
			直口	斜口	平瓦		剥片	鏡	
Ⅲ層				5					5
Ⅳ層	5	2	122	1	2	3			135
Ⅴa層	3	1	14		1	1			20
SH1			97						97
小湊状邊縫群1群	3		13		2				18
小湊状邊縫群2群	1		1						2
SK1			2						2
SK3			1						1
P13			1						1
P15			1						1
P16	2								2
合計点数	14	3	257	1	5	4			284

第6表 出土遺物集計表



遺物 番号	登録 番号	出土地 区	出土 層位	種別	特徴	長さ×幅さ×厚さ (mm)	外観要 約	内部構 造	底面調査	造形特徴・備考	写真図版 番号
1	A3	X445.Y925	V	陶文土器	圓筒	—×44×—	正角LR埋立	ナゲ	ナゲ	高脚片、最底板あり	11-3
2	B1	X445.Y910	V	陶生土器	高杯	—×—×—	大きい壺形で文様を描き	ヘラモガキ	—	脚部片	11-4
3	B2	X355.Y920	V'	陶生土器	鉢	—×—×—	細い脚壺形で文様を描き	ナゲ	—	口縁部分、やや風化	11-5
4	C3	X445.Y923	V'	土器器	鉢	—×15×—	底化により輪郭不明	円み	全体・脚部片	11-8	

遺物 番号	登録 番号	出土地 区	出土 層位	種別	名種	長さ×幅さ×厚さ (mm)	重さ(g)	石材	備考	写真図版 番号
5	Ka1	X445.Y920	V	剥片石器	石器	[32]×[63]×20	[12.6]	ガラス質安白 岩	いわゆる斜方型に近い形状をもつ。刃端に pojii光沢を伴う懸挂痕あ り。つまみ柄先端・刃部欠損欠損	11-9
6	Kc1	X445.Y920	V'	礫石器	用達不明石器	72×66×46	353.6	深緑色	上下端及び平行線の後内に打刃による剥離を施したる面っている。	12-1
7	Kc2	X445.Y930	V'	礫石器	磨一造+造石	97×86×60	823.6	安山岩	直表面中央に磨面と2割一時の凸面、夷面等に磨打痕。窓形	12-2
8	Kc3	X445.Y920	V	礫石器	磨-造石	[81]×[72]×43	[349.6]	正直面に磨面と凹面、1台欠損	12-3	
9	Kc4	X445.Y930	N	礫石器	凹凸	—×—×27	[301.7]	安山岩	直表面中央に凹面。1カ所損	12-4

第15図 基本層出土遺物

第6章 まとめ

大野田古墳群は、名取川下流の左岸自然堤防及び後背湿地に立地している。今回の第8次調査区は、遺跡の中心よりやや北寄りに位置する。調査区の南側隣接地には、本遺跡の認定のきっかけともなった大野田1・2号墳が存在しており、この周辺地域が古墳群の北限域と推定されるが、今回の調査では新たな古墳は検出されなかった。

調査は、基本層位のⅢ層上面とV層上面を行った。Ⅲ層上面の遺構は、溝跡3条、ピット5基である。出土遺物がないため、遺構の時期は不明であるが、周辺での調査例から、Ⅲ層上面では中世の道路跡が検出され、またⅢ層中には平安時代の火山灰が含まれることから、ピットについては平安～中世のものとみられる。但し溝跡については堆積土上部にI層が圧入された状況であることから、近世以降のものと思われる。V層上面の遺構は、堅穴住居跡1軒、柱列跡2列、溝跡4条、小溝状遺構群3群、土坑9基、ピット166基である。これらの遺構は、重複しながら調査区のほぼ全域から検出されており、同一面での検出ではあるが、各遺構間には幅広い時期差がある。

以下、V層上面における遺構の新旧関係とその性格が注目される柱列跡(SA1・2)について述べる。

[V層検出遺構の新旧関係について]

遺構の切り合い関係から確認した主な遺構の新旧関係を示すと第16図のようになる。

V層上面で検出された遺構のうち、もっとも古い時期の遺構と考えられるのは、SI1、SD7、小溝状遺構群2群である。これらの遺構に共通してみられる特徴として、灰黄褐色を基調とする淡い色調の堆積土であり、上層であるIV層が遺構内にみられないことや、主軸方位が30°前後西偏して構築されていることなどがあげられる。いずれも隣接して位置しているにもかかわらず、相々に遺構の切り合いがみられないことから、近接した時期の遺構である可能性も考えられる。これらの遺構のうち、具体的な時期を示すものとして、SI1から古墳時代前期の土師器が出土しており、住居跡は当該時期と考えられる。

土坑は9基検出されているが、このうち遺構の重複関係のないSK8を除き、概ねSI1、小溝状遺構群2群より新しく、SD5、小溝状遺構群1群より古い傾向がみられる。出土遺物がないため、各土坑の詳細な時期・性格については不明であるが、これらは小溝群2群から1群へかけての時期のもので、中には畑耕作に関連したものもあるとみられる。

SD4・5、小溝状遺構群1・3群は、V層上面で調査したものであるが、調査区壁際の土層断面観察の結果、IV層上面から掘り込まれたものであることが判明している。また、SD6は、壁際での断面観察は行っていないが、SD5と平行関係にあることや、西端が揃っていることなどから、ほぼ同時期の遺構と推測される。これらの状況から判断して、もっとも新しい時期の遺構であるSA1・2を含め、SD4～6、小溝状遺構群1・3群は、本来、IV層上面で検出されるべきものと考えられる。いずれも東西南北を意図して構築されている点に共通した意識が窺える。

遺構からの出土遺物が乏しく、各遺構の具体的な時期については不明であるが、ロクロ土師器の出土が全くみられないことから、住居跡以外の溝跡や小溝状遺構群など、畑耕作に関連した遺構の時期は古墳時代から奈良時代頃にかけての所産と思われる。



第16図 V層検出の主要遺構新旧関係図

【柱列跡（SA1・2）について】

今回の調査で検出された遺構のうち、崩邊での調査を含め新たに発見された遺構に柱列跡（SA1・2）がある。東西方向へ延びるもので、確認された全長は25m以上、中軸方位はN-89°-Wを示す。SA1・2は、中軸線間の距離で40cm程の間隔をおいて平行して並んでおり、各ピットはそれぞれ互い違いに位置している。

今回の調査区から約40m離れた東側には、平成12年度に調査が行われた大野田古墳群5A区がある。東西方向へ走る大溝（SD253）と平行して、ここでもほぼ同様の柱列跡（SA257・258）が検出されている。これらの柱列跡とSA1・2は一直線上に並んでおり、同一の遺構である可能性が考えられる。これについては、今後の調査の中でさらに検討が必要であるが、総延長距離80m以上にも及ぶ長大な遺構であることが想定される。

今回の調査区の東側に位置する大野田古墳群5A区及び8A区（平成15年度調査）からは、区画溝と推定される東西南北を意識した大溝の存在が確認されている。また、その北側にあたる袋前遺跡2A区（平成13年度調査）や3区（平成15年度調査）、大野田古墳群9A区（平成16年度調査）からは、明らかに一般集落のものとは異なる大型の掘立柱建物跡などが検出されている。こうした近年の発掘調査により、同地区には何らかの官衙的な施設が存在する可能性が指摘されている。

柱列跡が検出された位置は、上記地区の南側微高地端部にあたり、大野田古墳群5A区及び8A区から検出された大溝とはほぼ平行関係にあるものと推測される。現段階では、柱列跡の具体的な時期や性格については不明であるが、今後、周辺地区の発掘調査が進展するのを待って、上記地区との関連性を含め、あらためて検討を行う必要があると思われる。

引用・参考文献

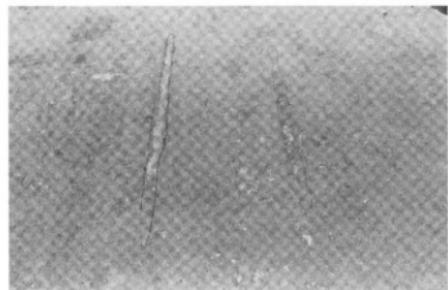
- 仙台市教育委員会（1982）：『大野田古墳群』『平成3－昭和56年度－』仙台市文化財調査報告書第41集
- 仙台市教育委員会（1990）：『下ノ内遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ－』仙台市文化財調査報告書第136集
- 仙台市教育委員会（1990）：『大野田古墳群－発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第138集
- 仙台市教育委員会（1993）：『下ノ内浦遺跡－第4次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第173集
- 仙台市教育委員会（1994）：『昭和北遺跡－発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第186集
- 仙台市教育委員会（1995）：『伊古田遺跡－仙台市高速鉄道関係道路発掘調査報告書Ⅲ－』仙台市文化財調査報告書第193集
- 仙台市教育委員会（1995）：『下ノ内浦遺跡－第5次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第202集
- 仙台市教育委員会（2000）：『大野田古墳群・王ノ塙遺跡・六反田遺跡－仙台市富沢駅周辺区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』仙台市文化財調査報告書第243集
- 仙台市教育委員会（2000）：『王ノ塙遺跡－都市計画道路「川内・鳴生線」高架遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』仙台市文化財調査報告書第249集
- 仙台市史編さん委員会（1995）：『仙台市史 特別編2 考古資料』 仙台市
- 氏家和典（1957）：『東北土師器の型式分類とその編年』『歴史』第14輯 東北史学会



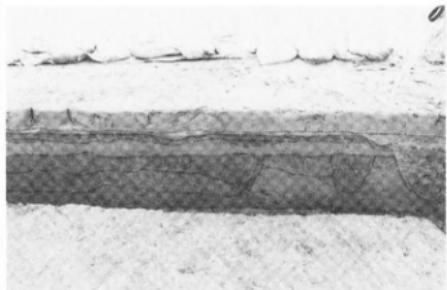
写真図版1 大野田古墳群周辺の空中写真（昭和58年国土地理院撮影）



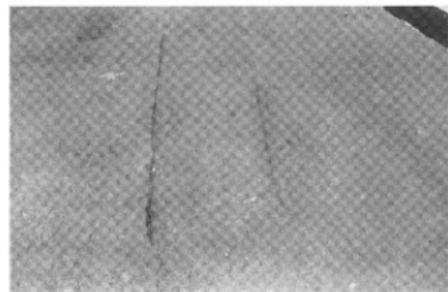
1. III層遺構完掘全景（東より）



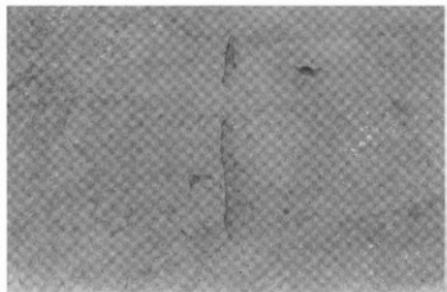
2. SD1・2検出状況（東より）



3. SD1・2断面状況（東より）



4. SD1・2完掘状況（東より）



5. SD3完掘状況（東より）

写真図版2 III層遺構完掘全景・溝跡



1. V層遺構検出全景（1）（東より）



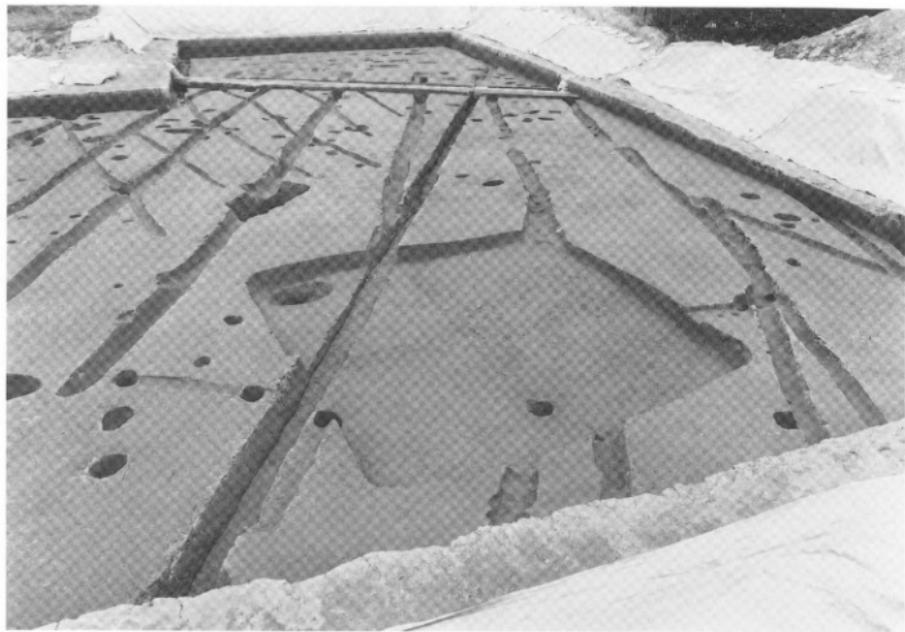
2. V層遺構完掘全景（1）（東より）
写真図版3 V層遺構検出・完掘全景（1）



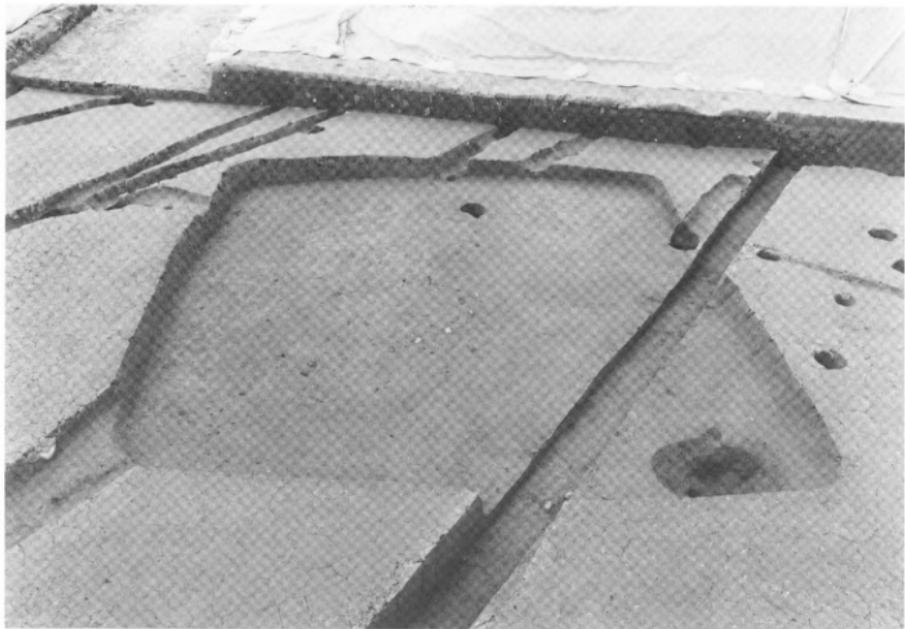
1. V層遺構検出全量 (2) (東より)



2. V層遺構完掘全景 (2) (東より)
写真図版4 V層遺構検出・完掘全景 (2)



1. V層北西側造構完掘全景（北東より）

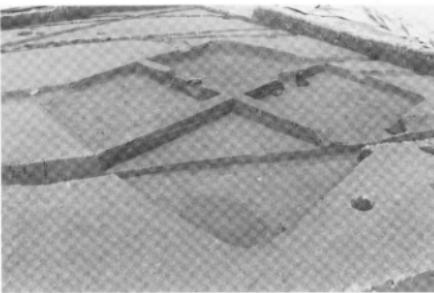


2. SI1 完掘状況（南より）

写真図版5 V層北西側造構完掘全景・竪穴住居跡



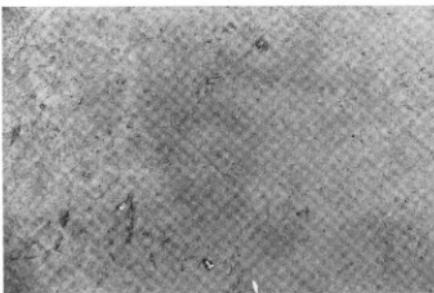
1. SI1 検出状況（北東より）



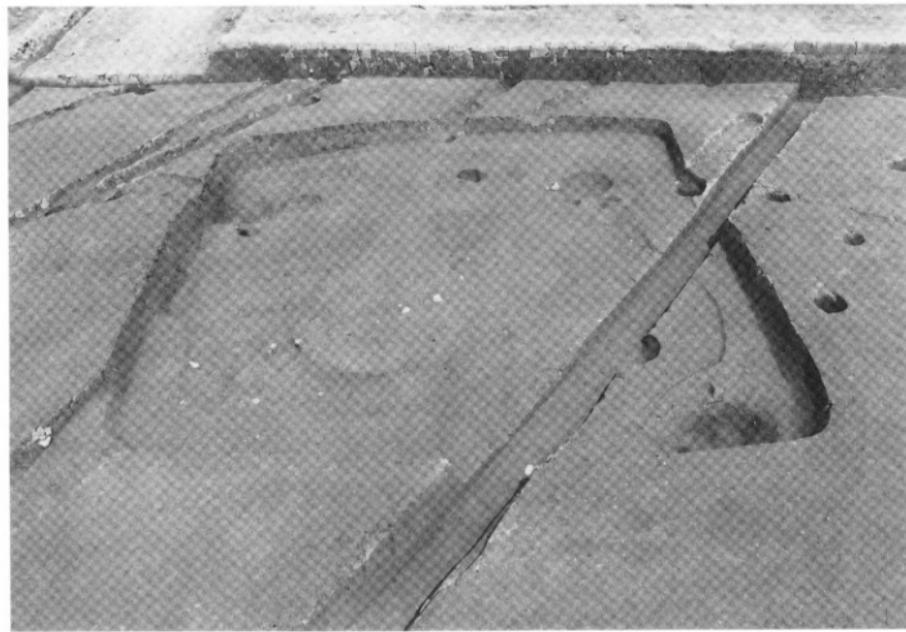
2. SI1 断面状況（南東より）



3. SI1 土師器鉢（C1）出土状況（南西より）

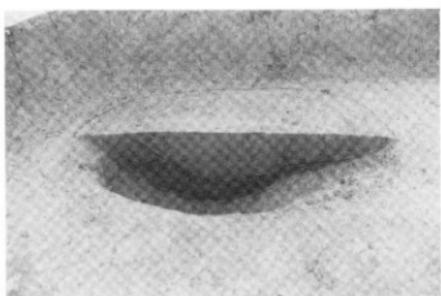


4. SI1 床面焼土プラン検出状況（南より）

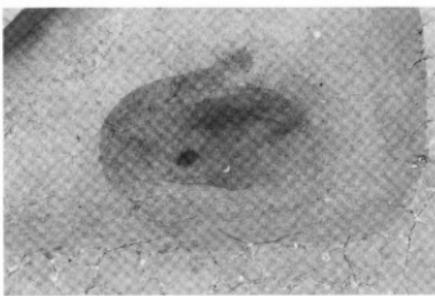


5. SI1 挖り方完掘状況（南より）

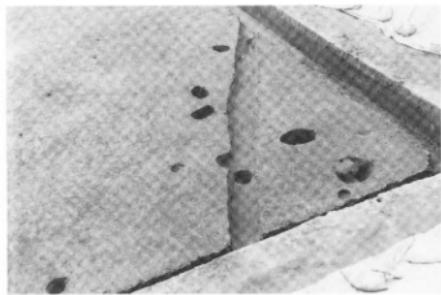
写真図版6 竪穴住居跡



1. SI1 内土坑断面状況（北より）



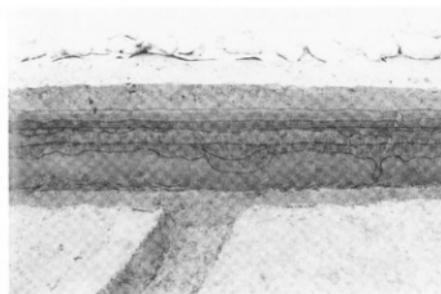
2. SI1 内土坑完掘状況（南より）



3. SD4 完掘状況（東より）



5. SD5、SA1・2 完掘状況（北東より）



4. SD4 東壁断面状況（西より）



7. SD7 完掘状況（北より）

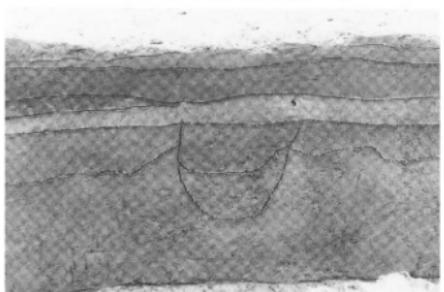
写真図版7 壇穴住居跡・溝跡



1. 小溝状遺構群1群完掘状況（東より）



2. 小溝状遺構群1群西側完掘状況（北より）



3. 小溝状遺構群1群10南壁断面状況（北より）



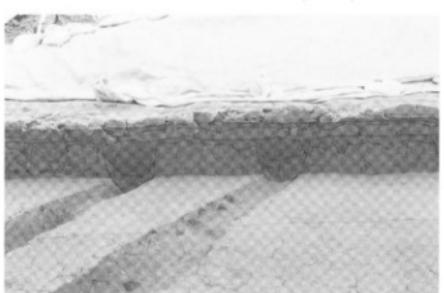
4. 小溝状遺構群1群3断面状況（南より）



5. 小溝状遺構群1群3完掘状況（南より）



6. 北西側小溝状遺構群1・3群完掘状況（北東より）



7. 小溝状遺構群1群1・3群3北壁断面状況（南より）

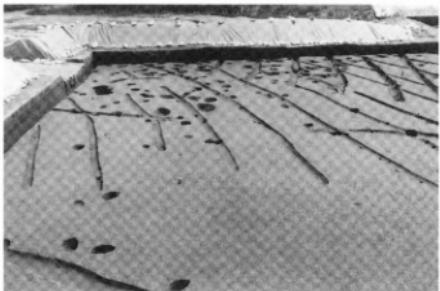


8. 小溝状遺構群3群2完掘状況（南より）

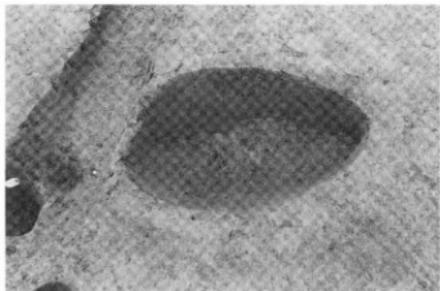
写真図版8 小溝状遺構群



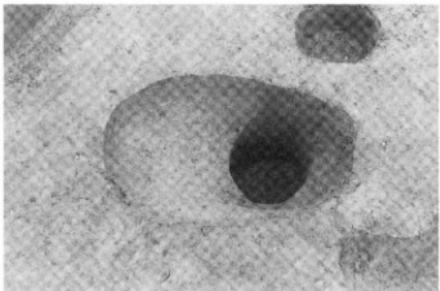
1. 小溝状遺構群2群東側検出状況（南東より）



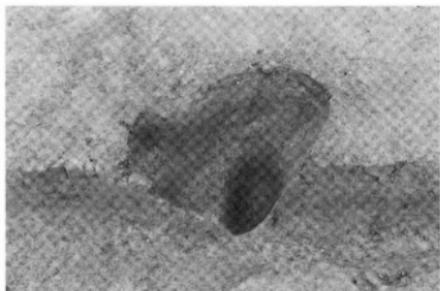
2. 小溝状遺構群2群東側完掘状況（北より）



3. SK1 完掘状況（西より）



4. SK2 完掘状況（南東より）



5. SK3 完掘状況（東より）



6. SK4 完掘状況（南より）

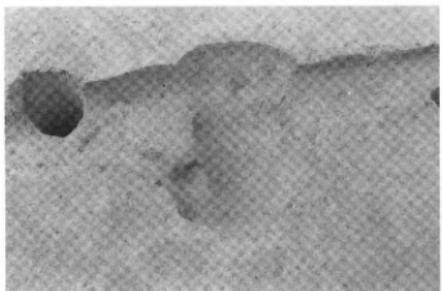


7. SK5 完掘状況（南より）

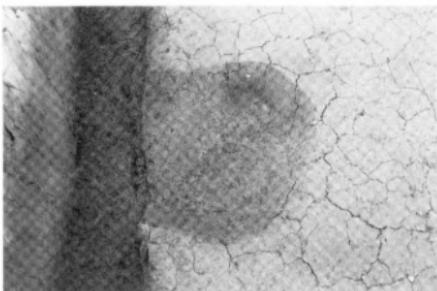


8. SK6 完掘状況（南より）

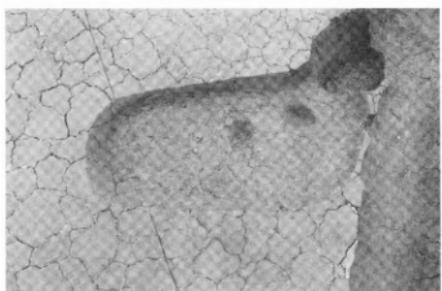
写真図版9 小溝状遺構群・土坑



1. SK7 完掘状況（南より）



2. SK8 完掘状況（南より）



3. SK9 完掘状況（北より）



4. 調査区南壁断面状況（北東より）



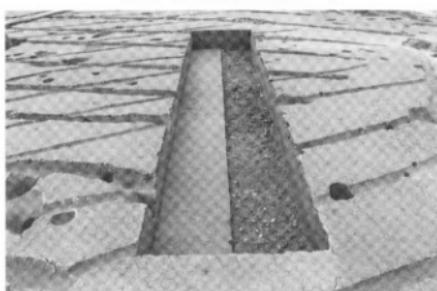
5. 調査区南壁西側断面状況（北東より）



6. 調査区東壁断面状況（南西より）



7. 下層調査区（北東側）全景（南より）



8. 下層調査区（中央）全景（東より）

写真図版10 土坑・基本層位・下層調査



1
A1 (第11図1)



2
A2 (第14図1)



3
A3 (第15図1)



4
B1 (第15図2)



5
B2 (第15図3)



6
C1 (第7図1)



7
C2 (第11図2)

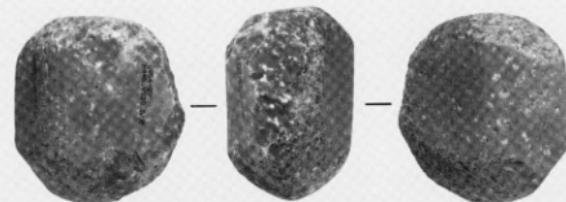


8
C3 (第15図4)



9
Ka1 (第15図5)

SI1:6 小溝群1群:1・7 PI34:2 基本層IV層:5・8 基本層V層:3・4・9



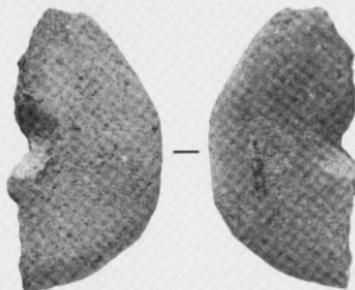
1
Kc1 (第15図6)



2
Kc2 (第15図7)



3
Kc3 (第15図8)



4
Kc4 (第15図9)

基本層IV層：1・2・4 基本層V層：3

写真図版12 基本層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おおのだこふんぐん						
書名	大野田古墳群						
副書名	第8次発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第290集						
編著者名	佐藤 浩、湯原勝美、戸部孝一						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区同分町三丁目7番1号 TEL 022-214-8894						
発行年月日	2005年2月						
ふりがな 所収遺跡	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
大野田古墳群 第8次調査	宮城県仙台市 太白区大野田 字宮脇	04100 01361	38°12'44"~ 140°52'44"		20040601 ~ 20040824	550m ²	「大野田 はぎの丸」 建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	等記事項	
大野田古墳群 第8次調査	集落跡 墓跡	古墳～中世	堅穴住居跡1軒 柱列跡2列 溝跡7条 烟跡（小溝状追構群） 土坑9基		縄文土器、弥生土器、 土師器、石器		

仙台市文化財調査報告書第290集

大野田古墳群

—第8次発掘調査報告書—

2005年2月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区同分町三丁目7番1号
文化財課 TEL.022(214) 8894

印刷 株式会社 文化総合企画
千葉県富里市日吉台1-23-12
TEL.0476(93)0593

